
超空の戦乙女と時空戦士達

天使の書物

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超空の戦乙女と時空戦士達

【Nコード】

N69201

【作者名】

天使の書物

【あらすじ】

日本時間1941年12月8日。南雲忠一中将率いる大日本帝国海軍空母機動部隊はハワイの真珠湾に停泊していた米国太平洋艦隊と、その司令部を攻撃。更に、第3次・第4次と攻撃を繰り返し、艦船の修理ドックや石油タンクを破壊。そして史実では取り逃した主力空母の撃沈。『あの男のお陰だな』と南雲は呟いた。

舞台・キャラクター紹介（前書き）

遂に、艦魂小説デビューです！

………昭和の兵器にはあまり
詳しくない上に史実とは違う闘いを
書きちゃいますが、その辺りは
お許しください。へ；

今回はキャラクター紹介のみに
終わりますが、次から楽しみつつ
頑張って完結を目指します！

舞台・キャラクター紹介

私が考案した小説「超空の戦乙女」。
その設定をここに公開いたします。

先ずは物語の舞台となる世界を
紹介したいと思います。

舞台は大きく分けて2つ。

一つは太平洋戦争の時代。
未来から来た若者達により
歴史が改変されていきます。

もう一つは22世紀の世界。
科学技術が大きく発展した世界で
未来兵器同士による激戦を
描いていく予定です。

それでは、物語の大部分を織り成す

メインキャラクター達を紹介します。

まずは未来から来た若者達です。

・タキ・オオシマ：

性別：♂

年齢：25歳

日本名：大島 瀧

未来から来た若者の1人。

未来世界では時空省に所属。

過去の重要人物への接触を
主な任務としている。

・ナルミ・アリス：

性別：♀

年齢：23歳

日本名：有栖 鳴実

未来から来た若者の1人。

未来世界ではタキ同様に
時空省に所属している。

過去の技術者達に未来技術を
伝授する事を主な任務としている。

それでは、太平洋戦争の時代を
生きるキャラクター達を紹介します。

・神谷 雪人…

性別…♂

年齢…17歳

戦艦『大和』に乗り込む若き水兵。
ある日偶然、艦魂・大和と出逢う。

真っ直ぐな心の持ち主であるが、
その真っ直ぐさが災いして
上官の拳骨を喰らう事もしばしば。

・大和…

性別：♀

外見年齢：16歳

戦艦『大和』に宿る艦魂。

世界最大の戦艦『大和』の雄姿からは想像出来ないほど大人しい少女。

艦魂として世に生を受けた事を

自らの不幸と考えており、

他の艦魂との付き合いも悪かったが、

雪人と出逢う事で艦魂としての

誇りを得ていくことになる。

- ・ 服装は大日本帝国海軍軍服を着用。

（ちなみに下はスカートではなくズボン）

- ・ 私服は全て和服。（艦魂の力で作る）

- ・ 髪型は長く伸ばした黒髪。

- ・ 体格はスレンダー系。

- ・ 余談ではあるが、戦艦『大和』の艦魂だけあってビンタの威力は全ての艦魂の中で最強を誇る。

・武蔵：

性別：♀

外見年齢：14歳

戦艦『武蔵』に宿る艦魂。

姉の大和と違い、活動的な少女。

普段は今時の女の子のような
振る舞いを見せるが、心の奥では
『武蔵』の艦魂として生を受けた事を
誇りに感じており、いざという時は
頼れる姐御である。

・服装は姉同様に帝国海軍軍服。
(ただし、下はミニスカート)

・私服は現代の女の子の服装。
(タキ達が未来から持ち込んだ
ファッション誌を見た武蔵が
艦魂の力で作り出した)

髪型は漆黒のショートヘア。

・体格は姉と異なり、所々に

程よく、女性的な身体ラインを崩さない程度の筋肉が付いている。

・武蔵の恋愛面における信条は「女はフェロモンで勝負」である。

これ以降も新しいキャラクターが登場する度に設定を公開しますので乞うご期待!!

舞台・キャラクター紹介（後書き）

作者「ついに艦魂作家デビュー！」

雪人「おめでとうございます！」

タキ「確か、先生の作品は……：SF要素と恋愛要素を取り入れた大長編になる予定ですね？」

ナルミ「昭和編の中盤から終盤は戦争に間に合わなかった兵器や計画・構想のみに終わった兵器も登場するらしいから兵器好きの人はヨダレダラダラになりそうだな」

作者「そうなんですよ。個人的にお気に入り『震電』もジェット化されて登場！」

雪人「おおお！！」

タキ「ソイツは凄い！！勝てる！！」

作者「まだ甘いな……君らは。

この天使の書物、そうアツサリに
勝たせるような事はさせんわ！！」

雪人&タキ&ナルミ「え……………」

No. 1 昭和編第1話『母なる戦乙女の悲劇』(前書き)

作者「ウツ、ウツ、ウツ……………」

うわああああ~~~~~!!!!!!」

タキ「どうされました？」

作者「だ、だって……………第1話から
滅茶苦茶悲しいんだから!!!」

ナルミ「戦争に悲劇は付き物だ」

作者「うわああああんっ!!!」

No. 1 昭和編第1話『母なる戦乙女の悲劇』

——日本時間1941年12月8日——

陽光が照りつける太平洋の上を
航行するアメリカ海軍の
主力空母『レキシントン』。

飛行板で2人の兵士が上半身を裸にして
キャッチボールを楽しんでいる様子を
アメリカ海軍の軍服に身を包んだ
1人の少女が遠くから眺めていた。

「見とれているのか、レベツカ」

いきなり後ろから声を掛けられ、
悲鳴を上げそうになる。

「何だ……ジョンか。びっくりした」

ジョン・スミス。

レキシントンの戦闘機隊に
所属するパイロットであり、

この艦で唯一、少女が見える存在だ。

「見とれてなんかいないわよ！」

そばかすが可愛らしい顔を真っ赤にする
レベッカの微笑ましい姿に目を細めた
ジョンは「可愛いな、お前は」と
レベッカの黄金色に輝くショートヘアを
撫でながらそう呟く。

「え……………今、何て？」

レベッカのブルーの瞳がジョンを
見つめ、ジョンの視線を釘付けにする。

「ジョン……………今、私の事を……………」

レベッカが頬を紅潮させながらも
期待を込めた表情と視線を彼に注ぐ。

その時。キャッチボールをしていた
兵士2人が放った一言が2人の
幸福な時間を引き裂いた。

「なんだ、あれは!？」

空を指差す兵士。ごく普通の男女から
軍人の顔に戻ったジョンとレベッカが
兵士の指差した方向を見つめる。

雲一つ無い晴天の空に浮かぶ無数の点。
その点が徐々に大きくなり、
それが飛行機だと気付くのに時間は
さほどかからなかった。

ジョンの体が自然に愛機へと駆け出す。

「敵襲！敵襲！パイロットは直ちに
機体に搭乗、発進せよ！」

F4Fワイルドキャット戦闘機が
レキシントンから次々と
討つべき敵の待つ空へと舞い上がった。

「本当に居ましたね、大尉」

零式艦上戦闘機を駆る杉本 義光大尉は
同じく零戦を駆る部下の驚嘆の言葉に
同意せざるを得なかった。

「ううむ：コイツは大物や！」

任務中は使わなかった関西弁がつい出てしまうが、大物を前にしてそんな些細な問題は気にならなかった。

「お、敵が艦上戦闘機を出しましたよ」
部下の言葉に、獲物を凝視すると確かに敵機が舞い上がってきている。

「ワイルドキャットか。……よし、零戦隊は先行して奴らを叩く！
艦攻と艦爆は後から続けえい！！」

猪の如く突進する零戦隊と後から続く九十七式艦攻隊と九十九式艦爆隊。

歴史改変の記念すべき第一戦目が火蓋を切って落とされた――

「っ……………強い……………」

ジョンは日本軍の零戦を相手に
苦戦を強いられていた。

だが、ここを通せば自分が想っている
少女が危険に晒されるのは明白だ。

「通すかよ……………!!」

その頃レキシントンの艦魂、
レベッカは腰から拳銃を引き抜き
上空の敵機に狙いを定めていた。

絶対に生き延びてやる。
そして、あの人に想いを告げるのだ。

敵部隊の一番先頭を飛んでいる
魚雷付きの機体————

恐らく雷撃機と思われる敵機の
コクピットに狙いを定めて
引き金を引く。

それと同時に対空砲が火を吹き、
敵機のコクピットが炎に包まれる。

「仕留めた！」

しかし、次の瞬間恐るべき光景を
レベッカは目の当たりにした。

何と、敵のパイロットがその身を
炎に焼かれているにも関わらず
凄まじい形相でこちらを見つめている。

そして、燃えゆく機体が爆発四散して
果てる直前に魚雷が宙へと放たれた。

「ああっ……………！？」

魚雷が彼女の左舷へと吸い込まれていく。

そして、爆発と共に左舷の

装甲が引き裂かれた。

「がはっっ!？」凄まじい苦痛が
腹の左側に走り、そこから生暖かい
血液と内臓が飛び出す。

「ジ……………ヨ……………」

飛行板に赤黒い液体と肉の塊を
ぶちまけながらレベッカが
倒れ伏す様子は上空のジョンからも
ハッキリと見えた。

「レベッカアアアアアアアアア!……!」

ジョンの悲痛な叫びが空に響く。

その叫びが通じたのか、彼女が
微かに息を吹き返す。

「ジ……………ヨ……………ン……………」

絶命寸前の空母、レベッカは
愛しい人が駆る機体を見つけ、
最後の力を振り絞り、
満面の笑みを浮かべる。

「I love you」

それがレベッカの最期の言葉だった。

飛行板に爆弾を喰らい、
左舷に続けざまに魚雷を受けた
レキシントンが爆沈して果てる。

「レベッカアアアアアアアアアア！……！！」

燃料が少ないのか、次々と早足で
去っていく敵機にジョンは
憎悪の視線を注ぐしかなかった。

大日本帝国海軍空母機動部隊旗艦、
『赤城』の艦橋でアメリカ海軍空母

『レキシントン』と、
『エンタープライズ』を撃沈したとの
報告を受けた南雲忠一中将が
微かに笑みを浮かべ、呟く。

「あの男のお陰だな」

———第2話に続く

No. 1 昭和編第1話『母なる戦乙女の悲劇』(後書き)

・キャラクター紹介：

・レキシントン：

性別：♀

外見年齢：18

アメリカ海軍空母『レキシントン』に宿る魂。愛称はレベッカ。

基本的に明るく、活動的な性格。運動神経抜群のわんぱく少女だが時折、年頃の少女らしい一面を見せる。

歴史に介入した人間が日本海軍に与えた情報により所在地を知られ、血祭りに上げられる。

せめてもの救いは最期に愛する男に想いを告げられたことだろう……

・ジョン・スミス：

性別…♂

年齢…21歳

レキシントン所属のパイロット。

明るく素直な青年であり、

レベッカを密かに想っていた。

愛するレベッカを失った事が

彼を歪ませていく……………

N o. 2 昭和編第2話 『未来から来た男』 (前書き)

今回は未来から来た男達の視点で
物語を描いていきます。

……えっ？大和と雪人ですか？
まだ先です。へへ；

No. 2 昭和編第2話 『未来から来た男』

——日本時間・1941年12月8日——

ここは空母機動部隊旗艦、『赤城』。

艦内に多くある部屋の中には
使われていない部屋が存在しており、

その1つである会議室では、
真珠湾攻撃の作戦に参加した
多くの戦乙女がパーティーを開いていた。

任務中でありながら不謹慎と
いつもなら咎められるが、
今回は大目に見てもらえる筈だ。

何せ、アメリカ海軍の太平洋艦隊が
誇る戦艦8隻を徹底的に叩き、

『あの男』のアドバイス通りに
艦船修理ドックや石油タンクを破壊、

真珠湾の機能を徹底的に破壊した上

更には敵の主力空母2隻までも
撃沈に至らしめたのだから、

空前絶後の戦果と言ってもおかしくない。

「みんな、おめでとう！

本当によくやってくれたわ！」

空母機動部隊旗艦『赤城』の艦魂、
赤城が仲間達に労いの言葉をかける。

「今日は特別よ、じゃんじゃん飲んで！」

「おおーし！飲むか！」

赤城の言葉に空母『加賀』の艦魂、
加賀がコップに日本酒を注いで
一気に喉の奥へと流し込む。

「……………ぷはーっ、やっぱり日本酒は
最高だ！どんどん飲むぞ！」

「それにしても、本当に……………
未来から来たんですかね？『あの男』」

赤城にお酌をしながら翔鶴が言う。

「そりゃ、信じるしかないでしょ？
敵空母の位置も言っていた場所と
ピッタリ一致する訳だし」
ほろ酔い気分の飛龍が肯定する。

「もしかして予言者だったりして」
そう言いながら瑞鶴が談義に参加する。

「スパイって事も有り得るわ」
続いて蒼龍も戦乙女達の輪に入る。

「みんな、もう止めなさい。
『あの男』のお陰で私達はこうして
かつてない勝利の美酒を
味わえているという事は
紛れもなく事実。そうでしょう？」

赤城の言葉に空母の艦魂達は
顔を見合わせ、ニカッと笑う。

「皆さん！一緒に飲みましょ！」

戦艦『比叡』、『霧島』の艦魂、
比叡と霧島が空母達を誘う。

「ええ、喜んで」

戦乙女達がパーティーで
大騒ぎしていた時、『赤城』の
とある一室で南雲はある男と
祝杯を交わしていた。

「大島君、ありがとう。
君のお陰で私達は素晴らしい
勝利の美酒を味わえた」
南雲は笑みを浮かべる。

「こんな得体の知れない私を
信じて下さり、本当に感謝します」

男——大島 瀧も笑みを浮かべた。

しかし、すぐに真顔へと戻る。
「……………しかし、本当に

大変なのはこれからです」

大島の言葉に南雲は大きく頷く。

「うむ。君の仲間が授けてくれる
未来技術に期待しておるよ」

———数週間後———

大本営の所有する建物の一室で
航空機メーカーの技術者達が
ある模型を血眼で見つめている。

「将来、あなた方が開発するであろう
戦闘機の1機、『震電』の模型です」

男——有栖 鳴実が手にした
模型は当時のレシプロ機の常識を
根本から覆す形状をしていた。

「そして、こちらは『秋水』。
これもあなた方が将来開発する機体です」

『秋水』と呼ばれる機体の方は
シャープな震電と異なり、
すんぐりした形状が特徴的だ。

「この2つの機体で空母機動部隊の
戦闘機を全て、ジェット化します」

有栖の言葉がその場にいた技術者達の
心の奥に眠っていた『技術者魂』の
凄まじい炎を甦らせた。

（ジェット戦闘機だけでなく、
近接信管や高性能レーダー開発も
あるからな………忙しい忙しい）

有栖を始め技術者達が国のために
多忙な毎日を送る中、大島は
新たな任務を受領して中国大陸へと
渡っていた。

「君が、僕の助けを必要としている
未来からのお客さんかい？」

道に迷っていた大島に話しかけたのは
関東軍の制服を纏った青年――――

――――否、女性だ。

艶やかな肌、妖しげな唇と
胸の膨らみがそれを証明している。

「……………はい。大島 瀧です」

――――第3話に続く

N o. 2 昭和編第2話 『未来から来た男』 (後書き)

瀧に話し掛けた軍服姿の女性は

多分皆さんがよくご存知のお方です

^ ^

N o. 3 昭和編第3話『男装の麗人、そして新たなる戦乙女』（前書き）

作者「今回はいよいよ大和が登場です」

鳴実「大和をバリバリ改造出来る日が来るとは……夢のようだよ……」

赤城「戦艦が航空兵器を相手に
互角かそれ以上に闘えるようになると
聞きましたけど………」

作者「それは本編のお楽しみで」

No. 3 昭和編第3話『男装の麗人、そして新たなる戦乙女』

「大島 瀧君か。僕は金壁輝。

川島 芳子と呼んでも構わんよ」

芳子が差し出した右手を握り返す大島。

そして暫く歩いた所で軍の

ジープに乗せられた。

「日本政府が国民党と組むとはな。

しかも、中国の統治権を全て

中国人に返還する上に、関東軍の

全軍撤退という好条件。

怪しい臭いがぶんぶんしているぞ」

「いいえ、日本政府と国民党の

お互いの利益を考慮しての条件です」

芳子の発言に驚きつつも理由を添えて

否定する瀧。すると芳子がさっきから

彼の身体を舐め回すように

見つめているのに気が付いた。

「随分良い身体をしているな、君は」

……単純に体格を褒めているのか。

それとも……別の意味で………？

「さ…早速、任務の説明をしますね」

少し慌てた様子で鞆から地図を取り出す瀧を見て芳子が舌打ちする音がした。

……後者だったようだ。

それはさておき。

「中国は見ての通り、ロシアが日本に攻撃する為の補給ポイントにはうってつけの場所です。」

膝の上に広げた地図を指差しながら説明する瀧とそれを熱心に聞く芳子。

「日本政府は関東軍を撤退させ、今後一切中国の統治には関与しません。」

そして国民党を唯一の正統な中国政府と見なして軍事同盟を結びます。

尚、国民党の軍には我が軍の開発する最新鋭兵器を無償で提供致します。これで日本政府の誠意を彼らに示す事が出来るはずです」

瀧の説明を聞いていた芳子が彼の顔を覗き込む。

その顔は軍人のものだった。

「……………で、それらの本当の目的は？」

「……………貴方は鋭いお方ですね。良いでしょう、話します。

中国にロシアを抑えて頂きたい」

芳子は大島の言葉に高笑いを上げる。

「それが君らの本音という訳か」

芳子の視線がさっきより一層鋭くなる。

「結局は中国を利用するわけだ」

「うっ……………」

芳子の言葉に返す答えが見つからない。

「……………しかし、潔いものだな」
突然鋭い視線が消え、笑う芳子に
驚きを隠せない大島。

「何時でも日本を攻められる刃を
あえて与えることで誠意を示すとは
なかなか面白い」

そういう芳子の顔に疑いの眼差しは
見当たらず、愉快そうな笑顔を
浮かべていた。

その頃、日本の呉で1人の戦乙女が
空を眺めていた。

彼女は帝国海軍の誇る最新鋭戦艦、
『大和』の艦魂、大和。

少女は自らの本体である鋼の塊を
忌々しげに見上げ、溜め息をつく。

その時だった。突如、感嘆の声が
聞こえてきたかと思うと

見たこともない男達が自分の甲板を
歩いていた。殆どは軍服から判断して
海軍の高官であると推測出来る。

しかし、たった1人飛び抜けて
背が高い男は何かがおかしい。

「何なの、この違和感は……………」

よく耳を澄ますと、妙な会話が
聞こえてきた。

「この艦ほど新兵器のテストヘッドに

相応しい軍艦は存在しないでしょう」

長身の男が興奮を隠さずに話す。

「開発中のレーダーと近接信管、
そして震電。これを付けるだけで
大和の戦闘力はアップする筈です」

(……私の体、いじり回すの? ……)

「問題は速度だな。その辺りの対策は
出来ているのかね？」

高官が長身の男に問い掛ける。

「はい。艦尾にジェットエンジンを
2基ほど設置すれば40ノットは
出せるでしょう。」

「なんと……期待しておるよ、
有栖 鳴実君！」

興奮した表情で鳴実の手を握り、
ぶんぶんと振る高官。

鳴実は1人の少女が自分を恨めしそうに
見つめていた事を知る由もなかった。

そしてこれから色々いじり回されるで
あろう自らの尻に手を掛け、
溜め息をつく少女。

——とある一室——

辺り一面モニターに囲まれた部屋で
1人の少年が注目しているモニターには
戦艦『大和』が映っていた。

「ふふふ……戦艦『大和』。君が
どのように生き、どのような最期を
迎えるのか……楽しみにしているよ」

余裕のある笑みを浮かべ、彼女を

見つめる少年。

そのアメジスト色の眼が黄金の輝きを
放ち始めた。それは永きにわたる
闘いの狼煙でもあった……………

———第4話に続く

№. 3 昭和編第3話『男装の麗人、そして新たなる戦乙女』（後書き）

鳴実「♪~~~~♪~~~~」

瀧「ゲッソリ……………」

作者「何があっただ……………」

鳴実「素晴らしい事が起きたよ！」

瀧「あれは怖かった……………」

鳴実「それはまた今度話すよ」

瀧「……………」

作者「……………一体、何なんだ……………」

N. 4 昭和編第4話『出逢い』（前書き）

作者「遂に雪人君を出せた……………」

雪人「待ちわびましたよ」

作者「今回は、事情により瀧君が
ゲッソリしていた理由は……………」

瀧「話すなああああ！！」

鳴実「落ち着け。それは外伝で
書く予定だから。本編では口にしない」

雪人「だそうです。それでは、
本編をお楽しみ下さい」

No. 4 昭和編第4話『出逢い』

――1942年1月末――

「もっと中国で過ごしたかったよ」

鳴実に愚痴を漏らす瀧。

「仕方あるまい。大和の新装備をテストする必要があるからな」

瀧をなだめる鳴実。

「有栖さん」突然響いた若い声に驚いた瀧が振り向くと、そこにはどう見ても10代後半位の少年が居た。

「彼は神谷 雪人上等整備兵。震電の整備士として大和に搭乗する予定だ。優秀な奴だから安心しろ」

鳴実が雪人を紹介し終わると彼が瀧に見事な敬礼をする。

「只今ご紹介預かりました
神谷 雪人上等整備兵です。
有栖さん、そちらの方は？」

雪人が瀧を興味津々に見つめる。
当時の日本人に比べて背が高いのだから
珍しい人間に見えたのだろう。

……実際、珍しい人間だが。

「コイツは大島 瀧。僕と同じく
未来から来た人間だ」

その時、雪人の目が輝きを宿し始めた。

「では……あの真珠湾攻撃の……
影の功労者と言われる方ですか！？」

その目はTVヒーローを観る
子供の目によく似ていた。

「はは、止してくれ。そう言われると
なんか照れくさいよ」

頬を赤らめる瀧を見て鳴実が
吹き出しそうになったのは秘密だ。

――数日後――

「今日も寒いなあ……………」

『大和』艦橋の最上階から海を眺める
大和はそんな独り言を漏らす。

その時、微かに内火艇のエンジン音が
したかと思うと、陸地の方から
その内火艇がやって来た。

内火艇に乗っているのは、
すっかり馴染みの操艇員達と、

背の高い日本人が2人、そして
まだ幼さが残る可愛らしい兵士。

「……………あっ！？アイツは！！！」

背の高い日本人の1人の顔は
前に見たことがある。

見間違う筈がない。確か、アイツは…

……………有栖 鳴実。

（そう、私の身体をいじり回した奴。
特に、お尻辺りを!!）

内心そう呟きつつ自分の艦尾を
振り返ると、そこには両舷に新設された
ジェット戦闘機用カタパルト2つと、
それぞれに1機ずつ乗っている
『震電』の姿が見えた。

（そう言えば、遠くの内火艇に居る
人の顔がハッキリ見えるように
なってる……………どうしてだろ？）

それもその筈だ。新型レーダーの搭載で
戦艦『大和』の索敵能力は大幅に
上昇したのだから、艦魂である大和も
視力が良くなるのは当然である。

だが、この時の彼女にそれを
知る由は無かった。

震電のチェックを終えた雪人は
星空を眺めようと、甲板に出る。

「あ………？」 甲板には既に先客が
居たようだが、暗闇でよく見えない。
「今晚は、綺麗な星空ですね」

暫く、沈黙が流れる。

「あの………お邪魔でしたか？
では、これで失礼します」

雪人はそう言って去ろうとする。

「待って」 その言葉が足を止めた。

星空を眺めていた時に突如、
声を掛けられた———ように感じて
声がした方を振り向くと、

今日、内火艇で搭乗したばかりの
可愛い兵士がこちらを見ていた。

「……………」

自分が『艦魂』という存在であり、
人間には姿が見えない事は知っていた。

しかし、見えない筈の自分が
人間に見られている。

「あの……お邪魔でしたか？
では、これで失礼します」

驚きのあまり言葉が出ない状態で
固まっており、その声で気が付くと
兵士が去ろうとしていた。

「……………待って」

兵士の足が止まる。

「あなた、私が見えるの？」

兵士が驚いてこちらを振り向く。

「お……女の子の……声……？」

無理もない。婦女子は
軍艦に乗れないのだから。

「私が見えるの？」再び問い掛ける。

「……………見えるよ……………」

その声は弱々しい声だった。

——とある一室——

「ふふふ、大和の姿を見せてあげるよ」

少年が笑みを浮かべ、部屋の中心に
浮かんでいる巨大な地球儀に手をかざす。

突然、月の光が増したかと思うと
目の前の影が明るく照らされた。

「あ……………」

色白でキメが細かく、透き通るような肌。

美しく輝く黒髪。

見たこともないほど澄んだ瞳。

それはまるで女神のようだった。

「……………君は……………」

「私は大和型戦艦1番艦『大和』の
艦魂。名前は本体と同じく大和。」

———第5話に続く

N o. 4 昭和編第4話『出逢い』 (後書き)

作者「一体、何があったんだ……………」

武蔵「私の出番はまだ——！？」

作者「ああ、武蔵か。もうちょっと待ってられないか？」

武蔵「待てないわよ！早く私のフェロモンで男を虜にしたいの！」

作者「やれやれ……………」

N O. 5 昭和編第5話『猶予』（前書き）

作者「遂に武蔵登場!!」

武蔵「待ちくたびれたわよ」

赤城「あらあら……新しい子ね？」

蒼龍「可愛い」

翔鶴「あ……多量失血死体発見」

飛龍「……………コイツ（武蔵）か」

瑞鶴「……………（武蔵の胸見る）ギリッ」

加賀「何て良いスタイルだ……………」

N o. 5 昭和編第5話『猶予』

「もう時間はあまりない。一刻も早く『例の人物』を見つけねば」

特殊な時計を見つめる瀧の顔は
険しいものであり、それは
鳴実も同様であった。

「ヤツらがこの世界に介入するまで
あと僅かしかない。それまでに
この世界の人類の意思を統一せねば、
『あの日』の二の舞を踏む」

瀧と鳴実が心に封印していた
忌まわしき記憶が甦る。

が、思い出すにはあまりにも
悲惨過ぎる記憶故に、再び蓋をした。

「あのような思いをするのは俺達だけで充分だ。……………だろう？ タキ」

鳴実が長い間呼ばなかった
彼の本名を口にする。

「ナルミ……。……………ああ、
今度こそ奴らを食い止める。……………
『あの日』、死んでいった人々の為に」

以下・大本営の戦略

・その1・日中同盟

日本政府と中国の国民党との間に
同盟を結び、北の守りを固める

・その2・東南アジア諸国の独立

東南アジアの諸国を独立させ、
その上で支援を行い、親日感情を育てる

・その3・樺太油田の確保

樺太に在る未開発油田を確保、
そこに製油所を建設する

・その4・南太平洋の諸島を確保

南太平洋の諸島に在る島を確保、
米軍基地があるものは、
基地を奪取、あるいは破壊する

・その5・爆撃機『富獄』の開発

震電や秋水で確立されたジェット機の
建造技術を活かして開発途中の
『富獄』をジェット爆撃機として
完成・実戦配備させる

・その6・米国の原爆開発妨害

『富嶽』で米国のマンハッタン計画に
関係する施設を徹底的に爆撃、
原爆開発能力を奪い去る

以上の事項を満たした後に、
戦艦部隊を先陣に、空母機動部隊を
後陣に構えた特務部隊による
ワシントン強襲を行い、力を誇示。
アメリカ政府には日本に有利な
平和条約を結ばせる。

「なあ、大和。どうして君はいつも
そんなに暗い顔をしているんだい？」

雪人が大和に問い掛ける。

「……………」

大和は黙って何も言わない。

「止めときな。大和姉は
こういう質問は苦手なんだ」

後ろを振り向くと、初めて見る服を
纏った少女が立っていた。

「!!!!!!!!!!!!!!」雪人が顔をトマトにする。

「あらあら。アタシのまばゆい美脚に
見とれちゃったの？」

クスクスと笑いながら健全な男子が
顔を赤らめる様を觀賞する少女。

「武蔵！？その格好は何ですか！！」
大和が妹を叱る。

「遅れてんのね。これ、2000年代の
女性ファッション誌に載ってたわよ」

「女はフェロモンで男子を征するのよ」

武蔵が雪人の前でワザと前かがみになり

「ウツ……………」

———第6話に続く

N. 5 昭和編第5話『猶予』(後書き)

武蔵「フッフ、どうだ。参ったか」

赤城「あらあら。空母を甘く見ちゃ駄目よ……………？(胸見せ付ける)」

武蔵「……………なっ……………！？」

赤城「時代が違うのよ」

武蔵「……………ハッ……………自分1人じゃ戦えない癖に生意気な奴ね」

赤城「……………あらあら、いつまでも古いカビみたいに大艦巨砲主義にへばりついている癖に口は達者ね」

「ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ」

（武蔵と赤城を取り巻くダークオーラ）

作者「な、何かヤバい事に……………」

雪人「ガクガクブルブル……………」

大和「あ、神谷君生き返った」

N o. 6 昭和編第6話『温かいよ』(前書き)

作者「温かいよ」

雪人「作者さん……………」

作者「……………かーちゃんの手料理」

雪人「お母さああん!!!! (ノド、)」

N o. 6 昭和編第6話『温かいよ』

「何があつたんだ？大和」

大和を心配そうに見つめる雪人。

「……………聞かないで……………」

そのまま俯いて何も言わない大和。

「私のことは放つと言ってよ……………」

「あ……………あの娘は……………」

ミニスカートのまぶしい太股を除けば
軍服で引き締まった印象を
醸し出している少女を見かけた

雪人が声を掛ける。

「あの……すみません」

少女が振り向いた瞬間、驚いた顔をする。

「あ、さっきの奴じゃん」

それは武蔵であつた。

「そうか、大和は………」

武蔵から事情を聞いた雪人が溜め息をつく。

「大和姉は軍艦として生まれたせいで普通の女の子として過ごせなくて

その満たされない感情を他の艦魂達にぶつけていたからね……………」

その武蔵の表情は

姉を想う妹そのものだった。

「心配なんだな、姉さんが……………」

「大和姉、他の艦魂とも仲が悪いからいざという時、見捨てられるかと思うと…………心配で、…………心配で、…………つく…………ひつく…………えつく…………」

目から大粒の涙を流す武蔵。

「……………大和を呼んでくれ。
集合場所はここ、大和の後部甲板だ」

「こんな所に呼び出して、何の用？」

明らかに不機嫌そうな表情の大和。

「その……艦魂って嫌なの？」

雪人がそれを口にした瞬間、
大和の表情が険しいものになる。

「……………もう……………私に……………
構うな!!……………冷たく、固い鉄の塊などに
……………構うな……………!!!!」

大和の口から放たれた、己の存在を呪い
己の存在を貶める言葉に雪人の
堪忍袋の緒が保たず、千切れた。

「いい加減にしろッ!!」

そして、大和につかつかと歩み寄り
その手を握りしめる。

「……………???.?」

大和は雪人の突然の行動が理解出来ず、
分からない、と顔に浮かべるしか
出来なかった。

「……………温かいよ」

雪人が優しい目で大和の瞳を見つめる。

「大和の手、温かくて柔らかいよ」

気が付くと、大和の目から
涙が溢れていた。

「……………本当に？」

大和の言葉に雪人が大きく頷く。
その瞳に偽りの色はなかった。

「……………大和姉」

武蔵が大和の手を握る。

「……………あったかいでしょ？」

武蔵の無垢な瞳が大和の心の氷を
残らず溶かしていく。

「……………武蔵ッ！！」

お互いに抱き合う姉妹を
微笑ましく見守る雪人。

ここはとある一室。

「面白くなってきたね。それでこそ、
征服のしがいがあるというものだ」

少年が邪悪な笑みを浮かべ、
来るべき闘いに備えていた。

———第7話に続く

N O. 6 昭和編第6話『温かいよ』(後書き)

作者「温かいよ」

雪人「今度は何ですか!？」

作者「……毛布……」

雪人「……………気持ち、分かります」

帝国海軍空母機動部隊の艦魂紹介（前書き）

作者「ここ暫く、テストですので
更新が遅れるかも知れません」

謎の少年「ふふふ……お疲れ様です」

作者「おわああ！？い、いつの間に！？」

帝国海軍空母機動部隊の艦魂紹介

・赤城：

性別：♀

外見年齢：19歳

大日本帝国海軍が誇る空母機動部隊の
旗艦である『赤城』に宿る魂。

旗艦を務めるだけのことはあり
統率力に優れている。

戦艦を『時代遅れ』見下したりと
問題点がないわけではない。

・服装は帝国海軍将校のものと
全く同じものを着用しており、
普段着もこれと同じ服を使っている。

・髪型は漆黒のポニーテール。

・体格は大人の女性に近い。

・余談だが、空母の艦魂は全員飛行服を持っている。

・加賀：

性別：♀

外見年齢：18歳

空母『加賀』に宿る魂。

空母機動部隊の中でも大の酒好き。

普段は単なる飲んだくれだが酔いが醒めると、性格が豹変。

戦闘を事務的感觉で捉え、

淡々と任務を消化する殺戮兵器と化す。

・普段の服装は帝国海軍将校の制服を着崩しているが、酔いが醒めるときちんと着こなす。

- ・髪型は左サイドテール。

- ・体格はスレンダー系

- ・加賀の現在の性格は過去に起きた『事件』の影響であるらしい。

- ・翔鶴：

性別：♀

外見年齢：13歳

空母『翔鶴』に宿る魂。
笑顔をモットーとする明るい少女。

- ・服装は公私共に軍服。
(但し、時々ミニスカにする)

- ・髪型はロングヘア！。

- ・体格は当然スレンダー系。

・翔鶴は笑顔至上主義者であり
余程のことが無い限り笑顔を崩さず、
その徹底ぶりは寝顔まで微笑む程である。

・瑞鶴：

性別：♀

外見年齢：11歳

空母『瑞鶴』に宿る魂。

姉に似て笑顔至上主義者。

・服装は軍服で、私服は和服。

・髪型はショートボブ。

・姉並みの笑顔至上主義者だが、
姉と異なり何か秘密があるようだ。

・飛龍：

性別：♀

外見年齢：17歳

空母『飛龍』に宿る魂。

思ったことをストレートに言う性格でかなりの男前な為、艦魂達にモテる。

・服装は軍服だが、着崩している。

私服はボーイッシュな服を好んで着る。

・肩まである髪を後ろで留めている。
(ポニーテールではありません)

・スポーツが大好きなわんぱく少女。

ちなみに筋金入りの犬派である。

・男を絶対服従させるテクに優れ、艦魂史上最強のDSである。

・蒼龍：

性別：♀

外見年齢：17

空母『蒼龍』に宿る魂。

飛龍の姉にあたるが、何故か容姿は妹と瓜二つである。

（艦魂でも非常に稀なケース）

だが、性格の面では言いたい事をストレートに伝えないなど様々な相違点が見受けられる。

・服装は軍服だが、妹同様着崩している。

私服は可愛い服を好んで着る。

・髪型はショートボブ。

・バレエに興味があり、その影響で身体がとても柔らかい。

妹とは対照的に筋金入りの猫派である。

・自分を引っ張ってくれる
頼もしい男性が好みのタイプであり
ややMが入っている。

（わざわざ書く必要はないが、
犬派の男性のみに対してはSとなる）

帝国海軍空母機動部隊の艦魂紹介（後書き）

謎の少年「日本がアメリカに
打ち勝った時こそ、時満ちる時だ」

謎の少女「はい、マスター」

謎の青年「我々は出撃準備を始めます」

謎の少年「読者の皆様。我々が成す
創世をとくご覧あれ……………」

謎の少女「その為には日本人の屍の山が
必要となります、マスター」

謎の青年「望むものは直ぐに手に入る」

作者「何なんだ、アンタ達はあ！？」

N o. 7 昭和編第7話『艦魂達の交流の始まり、そして異変』（前書き）

久々の更新再開となります。

今回はタイトルにも、あるとおり
異変が起きます。

No. 7 昭和編第7話『艦魂達の交流の始まり、そして異変』

――数ヶ月後――

日本軍は南太平洋諸島の確保に成功。

航空機による活躍もあるが、
一番の功労者は陸軍である。

後にドイツ軍屈指の名将となる
オットー・スコルツェニーや

『砂漠の狐』の異名で現在もその名を
世界中に轟かせている名戦術家、

エルヴィン・ヨハネス・オイゲン・
ロンメルの特例メニユーの下
地獄の訓練を耐え抜いた精鋭部隊だ。

ちなみにスコルツェニーは
真珠湾攻撃の際、大規模な特殊部隊を
率いてハワイのアメリカ軍に潜入、

日本軍による攻撃に先立って各所でレーダー破壊並びに対空火器破壊を行った上、太平洋艦隊の頭脳である司令部を奇襲して司令官達を殺害。

更には戦車を奪取して駐機中の航空機を破壊するなど、

日本軍に引けを取らない活躍で

枢軸国の将兵達からしてみれば英雄的存在なのである。

ちなみに、この時点ではドイツはアメリカに宣戦布告していないので

一時的にドイツ系義勇日本兵として部隊ごと第三国を経由してアメリカに潜入、偽装書類で補充部隊としてハワイへ赴任。

容姿が有名なスコルツェニーのみは観光客としての潜入となった。

以上で説明を終わります。

読者の皆様方はこの戦法を決して
連合国側に口外せぬように（笑）

———ここは、サイパン———

「あ、あの……金剛、さん」

今、大和は帝国海軍の艦魂達の
中でもベテランの戦乙女である

金剛型戦艦1番艦『金剛』の
艦魂、金剛に挨拶をしている最中だった。

「怖がらなくてもいいわ、大和」

東洋人と西洋人の特徴を兼ね備えた
美少女は優しく微笑みながら
大和の肩に手を置く。

「焦らなくてもいいわ。
私達は同じ艦魂なんだから、
すぐに馴染めるよ」

金剛の優しい心に触れてか、
大和の表情がみるみる和らいでいく。

「まずは私の妹達からね」

榛名がテレパシーで妹達を呼び、
暫くして3人の少女が現れた。

「右から次女、比叡」

金剛が比叡の名を呼ぶと同時に
長いツインテールの少女が
可愛らしく敬礼する。

「金剛型戦艦2番艦、『比叡』の
艦魂、比叡ですっ」

「次に三女、榛名」

「金剛型戦艦3番艦『榛名』の
艦魂、榛名であります」

髪をシニヨンに纏めた少女が
その可愛らしい容姿に似合わぬ
優雅な敬礼を見せる。

「四女で末っ子の霧島」

「金剛型戦艦4番艦『霧島』の
艦魂、霧島だよ」

ショートヘアの少女が元気よく敬礼する。

数時間後、サイパン島近くの海。

少し西に傾いた太陽が照らす海に
突如としてプラズマが発生、
それが収まると、そこには
この時代に存在しない筈の艦が居た。

キエフ級重航空巡洋艦1番艦『キエフ』。
ソビエト社会主義共和国連邦海軍が

モスクワ級ヘリコプター巡洋艦の
代替艦として開発した、
ソ連初の固定翼機搭載艦だ。

しかし、この艦が完成するのは
この時代から33年後のことである。

——『キエフ』艦橋——

「味方を全てロストしました！」

「通信、応答ありません！」

オペレーター達が慌ただしく動き回る
艦橋にソ連軍の軍服を纏った
ロシア系の少女がただ1人立っていた。

彼女は『キエフ』の艦魂、キエフ。

この艦で彼女が見える人間は、

彼女の隣に立っているロシア系の大男、
ユージェン・ガガノフ大佐くらいだ。

「ガガノフ大佐、偵察機を
出してくれないか？」

少女が可愛らしい容姿に似合わぬ
軍人じみた言葉で訪ねる。

「私は偵察機が見たものを
感じ取れるから、役立つぞ」

「うむむむむ……………」

ガガノフは暫く考えた後、顔を上げた。

「よし、Y a k—38を偵察に出せ」

—————第8話に続く

No. 7 昭和編第7話『艦魂達の交流の始まり、そして異変』（後書き）

大和「えーと……………何か、
艦魂達のドラマがかなり
省かれたような気がします」

作者「作品バランスを考えてな。
その辺りのエピソードは外伝として
書いていくつもりだ」

雪人「……………もしかして、
あれも書くんですか？」

作者「フッフ……………書かねば
面白くなるまいよ」（ニヤリ）

雪人「……………」（赤面）

瀧「ああああ、と、トラウマが！」

鳴実「あ、そういえばお前の話も
外伝シリーズにリリースするらしいぞ」

瀧「いやああああ！私の醜態があああ！」

N o. 8 昭和編第8話『狂い始める計画』(前書き)

寝不足気味なので前書きと
後書きはあまり書いていません

m
┌
└ m

N o . 8 昭和編第8話『狂い始める計画』

大和が金剛・比叡・榛名・霧島と
交流を深めているのと同様に同じくして

サイパンの海を眺めている雪人。

「泳がないのか？」

後ろから声がすると瀧が立っていた。

「はい。いつ敵さんが来るか
分かりませんからね」

その時だった。聞き慣れた
ジェットエンジンの音がしたのは。

「この音……震電でも秋水でもない」

音がする方向を凝視すると、
何かが煌めいているのが見える。

それは徐々に大きくなり、
それが見たこともない航空機で
あることに気付くのにさほど
時間は掛からなかった。

「Y a k—38……………だど!？」

瀧が機体の名を呼んだ瞬間、
それは艦隊の上空を飛び越え
引き返していった。

「……………何故、あの機体が……………」

「何っ!？すると、我々は艦ごと
太平洋戦争の時代に……………」

タイムスリップしたというのか!？」

ガガノフ大佐は偵察に赴いた
バルサム・イワノフ中尉の機体を
介して敵を見たキエフの報告に
驚きを隠せないでいた。

「しかし、大佐。どう見ても妙なのだ。
我々の知る歴史とは全く異なる」

キエフは一息おいて続けた。

「あれから更に偵察を続けて
米軍のものと思しき潜水艦を発見、
暗号通信を傍受したのだが
アメリカは日本軍に苦戦して、
南太平洋の覇権を失ったようだ」

「……………成程、そういうことか」

ガガノフ大佐が何かを考えて
結論に達したようだが、それが何なのか
キエフには理解出来ていないようだ。

「奴らにも我々と同じく未来から来た人間が居るのだろう。そうでなければ歴史の食い違いは説明出来ん」

『キエフ』の甲板で星空を眺めるガガノフ大佐。

「イリーナ……………」

亡き娘の写真入りペンダントを眺めるその目には何時もの厳格な

ソビエト社会主義共和国連邦海軍将校ユージェン・ガガノフ大佐の姿は無く

1人の父親としての姿を露わにしていた。

「父さんは今、大変な事になっている。今までに無いくらいだね。だが…………必ず戻るよ。お前と母さんの墓参りもしなきゃいけないしね」

そして一息おいて星空に目を移す。

「お前が母さんと一緒に星になった時は父さん、悲しくてな、悲しくてな。泣いてばかりだったよ。」

何で、もっともっとお前に構ってやれなかったのかと自分を責めもしたよ。

だが、ある日父さんの前に1人の天使が現れた。だから今の父さんがあるんだ。だから、心配するな」

そんなガガノフ大佐の姿を遠くから眺めていたキエフは、
彼に対する親しみが湧くのを感じた。

再編成された空母機動部隊の旗艦、

『赤城』の中では空母機動部隊の重要ポストにある将校達と瀧、鳴実による緊急会議が開かれていた。

原因はもちろん昼に飛来したソ連海軍の垂直離着陸機Yak-38、通称フオージャーだ。

「瀧、一体どういうことだ」

鳴実が瀧にひそひそと話し掛ける。

「それはこっちが訊きたいよ、鳴実」

溜息混じりに答える瀧。

同じ頃、別の会議室では艦魂達による緊急会議が行われていた。

「今日、現れたジェット機だが……
諸君らはどう思う？聞かせてくれ」

空母機動部隊のもう1人の
司令長官という顔を持つ赤城が
空母の艦魂達に問い掛ける。

「頭に来るくらい速すぎる。以上」

飛龍がストレートに答える。

「えーと、何とかなるかな……アハハ」

ここまで来ても呑気な翔鶴。

「わ、私も姉と同意見です……………」

瑞鶴、お前もか……………！

「とにかくやるしかない」

そう言って意気込む蒼龍。

「……………ちょっと待って。水を」

加賀が艦魂の力で発現した一升瓶を
再び粒子に戻し、水入りのコップを出す。

「……………!？」

この行動に他の艦魂達が注目した。

———第9話に続く

N O. 8 昭和編第8話『狂い始める計画』（後書き）

作者「最近睡眠不足なんで寝るわ」

武蔵「短っ！」

No. 9 昭和編第9話『戦艦と空母の対立』(前書き)

作者「今回は赤城が初めて冷酷な面を露わにするストーリーです」

謎の少年「ふふふ、艦魂は実に面白いね……………」

作者「またお前かよ。一体何者なんだ……………」

謎の少年「さあね。それと……山本五十六長官の前代未聞の大博打に期待していますよ」

作者「な……………何故それをつつ!?!」

No. 9 昭和編第9話『戦艦と空母の対立』

水を飲み干した加賀がコップを戻すと
いきなり軍服を整え、艦魂の力で
会議室のテーブルの真ん中に
立体映像を作り出す。

「この航空機は形状から推測して
艦載型と思われます。ですから
母艦を見つけて撃沈するのが
最良の策かと存じます」

普段の荒っぽい口調は、その名残を
微塵も残さずに消え失せていた。

「但し、母艦の所在並びに
戦闘能力が不明な為、
迂闊に動けません」

「母艦の種別はおそらく、ソ連海軍のキエフ級重航空巡洋艦です」

鳴実がスクリーンにキエフ級の写真を映し出すのと同時にどよめきが起きた。

「これは1975年にソ連海軍が完成させる軽空母で、艦載機として垂直離着陸機を搭載しています」

「垂直離着陸機？」

将校の1人が鳴実に問い掛ける。

「滑走路を必要としない航空機です。ですので格納庫と発着場さえあれば空母以外の艦船でも運用可能です」

その言葉で再びどよめきが起きる。

「今、空母以外でも運用出来ると、

確かにそう言ったな？」

将校の顔は興奮状態の為、紅潮していた。

将校が何を言いたいのかを察した鳴実が
申し訳なさそうに首を縦に振る。

「はい。しかし……残念ながら
今の我が国の技術水準では
開発は不可能です、申し訳ありません」

かなり、がっかりしたらしく
肩を落とす将校。

敵の母艦がキエフ級であるという
情報を入手した艦魂達は
一気に燃え上がり始めた。

「おのれ、アカの手先め……………!!」

飛龍が拳を握り締める。

「アカの艦を永遠に海の底に叩き落としてやりましょう！」

妹同様に蒼龍も意気込みを見せる。

「落ち着きなさい、2人とも。相手は未来の艦なのよ？」

赤城が彼女達をなだめる。

「キエフ級は軽空母でありながら水上戦闘艦並みに誘導弾などの未来兵器を積めるというわ。」

でも、所詮は艦。航空機にはかなうはずがない」

赤城の顔は自信に満ち溢れていた。

「航空機で撃沈するわ」

その時。会議室の扉が開け放たれ、

2人の参謀を引き連れた金剛が

怒りに満ちた表情で部屋に踏み込んだ。

「戦艦部隊の司令長官として
抗議させて貰おう」

「時代遅れの戦艦が何の用だ」

赤城が初めて冷酷な面を見せる。

「我らは同じ大日本帝国の軍人であり
誇り高き帝国海軍に属する軍人なのだ。つまり、
帝国海軍の空母機
動部隊の
危機は我ら戦艦部隊の危機でも
ある筈だ。違うか……………?」

赤城の無機質な目を見据える金剛。

「確かに我らは同じ帝国海軍の軍人だ。
……………だが、違うな。我ら空母は

時代の最先端を往く新兵器。

大艦巨砲主義という過去の遺物に
へばりついているカビが何をほざく」

「……………確かに我ら戦艦は
時代遅れで過去の遺物だ。だが…………

無力ではないっ！…………あの艦が
仕掛けてきた時こそ、貴様が言う
過去の遺物にへばりついたカビの
意地と大和魂を見せつけてくれる！！」

金剛はそう言い、部屋を去った。

ここは『キエフ』艦橋。

「艦長、日本軍に攻撃しましょう」

将校の1人がガガノフ大佐に意見を言う。

「日本軍の増長を許せば、祖国の未来が危うくなります。どうか、ご決断を」

数人の将校達の視線を浴びたガガノフが腕組みをして考え込む。

「……………分かった。

これより我が艦は祖国の未来を護るべく日本海軍の艦隊に攻撃を行う！」

「ははっ！……………Y a k－38は武装を整え、
発艦準備！索敵班並びに砲雷班は
対空迎撃・対艦戦闘準備に入れ！」

ガガノフの言葉を受けた副官が部下達に指示を出す。

赤城のレーダーに複数の光点が現れる。

「電探^{レーダー}に反応です！」

「……………！？……………これはっ……………速い！」

次の瞬間、飛来したロケット弾により
数隻の駆逐艦が爆沈していく光景が
サイパンの海を赤黒く染めた。

「兼ねてからの指示通りに艦載機を
発艦させろ！対空砲、迎撃準備！」

『キエフ』から発艦したYak-38部隊の
パイロット、イヴァン・バリコフ中尉は
敵艦隊を視認した瞬間、感嘆を漏らした。

「世界初の空母機動部隊を創設した国の
海軍だけのことはあるな。
何と壮観な光景だろう」

「攻撃を開始する！各自、

自由に敵を攻撃せよ！……………散開！」

隊長の命令で僚機が次々と
対艦ミサイルを解き放つ。

「やれやれ……勿体無いが、仕方無い」

バリコフ中尉は操縦桿を強く握った。

———第10話に続く

No. 9 昭和編第9話『戦艦と空母の対立』(後書き)

謎の少年「さて……………日本軍は
ピンチ状態だ。こんな時はどうする」

謎の青年「マスター、おそれながら
意見を申し上げたく存じます」

謎の少年「聞かせてくれ」

謎の青年「アレを送ってみては
いかがでしょうか」

謎の少年「…そうだね。それもいいね」

作者「コラァ！何ヒソヒソしとるかぁ！」

No. 10 昭和編第10話『大艦巨砲主義の意地と大和魂』（前書き）

あつと言う間に赤城が改心しちゃいます
^ ^ ;

赤城と金剛の対立についての
詳細は外伝にて（いつ書くんだよ！ ^ ^ ;）

No. 10 昭和編第10話『大艦巨砲主義の意地と大和魂』

「来い、赤いハエ共め。」

赤城型航空母艦1番艦『赤城』の艦魂、赤城が相手をしてやる！」

赤城が日本刀を抜刀、切っ先を敵機に向けて構えた。

潮風が自慢のポニーテールを揺らす。

「幾ら優れたジェット機であろうとジェット機の弱点は直っていない！！」

フォージャーの1機が獲物をこちらに定めたらしく、高速で向かってくる。

「……………隙ありいいいい！！！！」

赤城の斬撃と『赤城』の対空機銃弾に

襲われたフォージャーは
旋回して回避しようとしたが、

近距離の攻撃を避けるには高速すぎた。

機関銃弾がフォージャーのコクピットを
粉々に打ち碎き、操縦士を失った
機体はそのまま海へと突っ込む。

「見たか、これが大日本帝国の誇る
帝国海軍空母機動部隊の旗艦の力だ」

「オボネイノフが墜ちました」

部下のフォージャーから報告を受けた
部隊長のイワン・ガイダル大尉は
部下達に作戦変更を伝えた。

「敵は予想以上に手強い。
集団で攻撃するのだ！」

複数のフォージャーが集まり始める。

「まずはオボネイノフの仇を討つ！」

フォージャー全機が赤城を標的に
定め、翼の下にぶら下げた
ミサイルの発射準備を行う。

「発射あああ！！」フォージャーから
放たれた空対艦ミサイルが
赤城の無防備な横腹を捉える。

「……………不覚！！……………」

世界がスローモーションになり、
じわじわと迫る死の恐怖が赤城の
精神を丸呑みにしようとした瞬間。

目の前に1人の戦乙女が現れ、

自分を庇った。

「ドゴオオオオオオン！！」

凄まじい爆発音がする。

「ズドオオオオオオン！！」

続いて14インチ砲8門が
火を吹く音が戦場に響いた。

凄まじい砲撃音が止むと、
目の前に金剛が居た。

「……………金剛……………ッ！？」

彼女の左腹が無残に引き裂かれ、
中にあったものは消え失せている。

そのまま、飛行板に倒れ伏す金剛。

「金剛ッッッ！！しっかりしろ！！」

その場にしゃがみ、金剛を仰向けにする。

「しかと目に焼き付けたか。

これが……大艦巨砲主義という

過去の遺物にへばりついているカビの
意地と大和魂だ………」

ニヤリと笑う金剛。

「否………否ッ！！見事であった！！」

しかと目に焼き付けたぞ、戦艦と

大艦巨砲主義の魂を！！

貴様が見せてくれた意地と大和魂、
実に見事であった！！」

涙を溜めた赤城の目は以前のような
傲慢な色はしておらず、

かつてない敬意と賞賛がこもっていた。

「今までの非礼を許してくれ、金剛」

「勿論だ。……だが、最期に一つ頼みがある……」

金剛の目が徐々に虚ろになりつつある。

「ああ、頼みとはッ!？」

赤城が涙を必死に堪えながら応える。

「お前の温もりを知りたい」

「……………分かった」

赤城の手を借りながら上半身を起こした金剛が彼女を両腕の中に抱き寄せる。

「温かい……………何と……………温かく、
……………何と、広いことか……………」

……………貴様が……………空母機動部隊の……………
……………旗艦に選ばれた理由が……………」

……………判ったような気が……………する……………」

金剛の言葉は赤城の心に効いた。

どの巨砲が放つ一撃よりも。

「金剛……………ッ……………ヒック……………
……………ヒック……………ヒック……………」

もはや涙を堪える力など
何処にも無かった。

「……………残った戦艦達を……………頼む」

そう言って微笑む金剛の身体が
徐々に淡い水色に光り輝く粒子へと
変わっていく。

「……………分かった、金剛……………！」

……………金剛……………金剛……………金剛ッッッ！！」

金剛の身体が徐々に透け始めてきた。

「今、暫しの間の別れだ。

……………さらば、我が友よ……………」

最後の粒子が天へ昇った時、

力尽きた『金剛』が鋼の身体を静かに
母なる海へと沈めていく様子が
目前に広がっていた。

涙を拭った赤城は、金剛が昇った
天へ向けて優雅に敬礼した。

「ガガノフ大佐！Y a k－38部隊が……ッ……
ぜ………全機………ロスト………
………しました………」

オペレーターが声を震わせながら
戦況の報告を行う。

「バ………バカな………あ、ありえん」

衝撃を受けた副官が思わず
現実から逃避しようとする。

その時。

「総員、対艦戦準備」

どんな状況でも変わらない
頼もしい声が艦橋に響いた。

N o. 10 昭和編第10話『大艦巨砲主義の意地と大和魂』（後書き）

金剛「赤城が改心してくれたので
安心して私も作者サイドに逝ける」

作者「作者サイドって……………
いつの間にそんな設定を……………」

金剛「死んだ艦魂は作者サイドに
逝くのが普通になっているぞ」

作者「おいおい！」

No. 11 昭和編第11話『キエフ、大海に没す』（前書き）

未来からの迷い人に悲劇が訪れます。

時代の流れにあらがおうとしたキエフの
最期をとくにご覧あれ！

No. 11 昭和編第11話『キエフ、大海に没す』

その声の主は『キエフ』の艦長を務める
ユージェン・ガガノフ大佐その人だった。

「何が起きたかは知らんが、
仲間の死を悲しむのは後だ。
我々にはまだこの艦があるのだ！」

混乱に陥っていたブリッジクルー達が
その言葉で落ち着きを取り戻す。

「艦対艦ミサイル発射準備完了」

「対空攻撃準備完了」

本来の能力を遺憾なく発揮する
クルーに先程の迷いは見られなかった。

「聞けっ！共に闘う兵士達よ！！」

これより『キエフ』は――――
日本艦隊への攻撃を敢行する！

祖国の未来を脅かす日本海軍の連中に

我々、ソビエト海軍軍人の魂を
見せつけてやれっ！！」

ガガノフが檄を飛ばした直後、

歓声と雄叫びが混じった声が

『キエフ』を、サイパンの海を震わせた。

ここは『比叡』艦橋。

「高速接近中の飛行物体を補足！」

電探要員（レーダー要員）が
ミサイルの接近を告げる。

「総員、何かに掴まれ!!」

艦長がそう告げた直後、

ミサイルが比叡の右舷に直撃した。

「姉上!」「お姉ちゃん!」

比叡が鮮血を撒き散らす姿を見て

榛名と霧島がほぼ同時に叫ぶ。

「ぐうつ……………ま、負けないです。」

私は…………金剛お姉ちゃんの代わりに

榛名や霧島を守らなきゃいけないんです」

しかし、次弾を艦尾に喰らい、
行動不能に陥ってしまう。

「姉上、後は我らが!!」

『比叡』が『キエフ』を

引き付けてくれたお陰で

『榛名』、『霧島』、『長門』、
『陸奥』は無傷状態で

敵艦にかなり接近出来た。

「思った以上にしぶといな」

ガガノフは戦艦の想像以上の
頑丈さに自分の判断ミスを
認めざるを得なかった。

これも近代兵器を過信した結果である。

「か……………数が……………多すぎます」

「対空・対艦攻撃……………共に……………
対応しきれませんっ……………!!」

そこへ、秋水部隊が
ロケット弾をお見舞いする。

飛行甲板、艦橋、ミサイルランチャーに
容赦なく突き刺さるロケット弾。

「がはっっ!?!」

背中、右目、腕から鮮血を
吹き出して床に倒れるキエフ。

「ぐうっ……………大佐、無事ですか…
……………大佐……………?」

辺りを見回すと、腹に破片を
喰らって倒れているガガノフの
姿がそこにあった。

「大佐ッッッ!?」

「……………キエフ、すまなかった」

口から鮮血を吐きつつも
キエフに託びるガガノフ。

「そんな……………っ、大佐は…、大佐は
よくやってくださいました……………ッ!」

キエフが涙を流す。

「大佐、最後に1つお願いが」

「何だい、キエフ」

キエフが顔を赤らめながら
ガガノフを見つめる。

「『お父さん』って呼ばせて下さい」

驚いた表情のガガノフ。

「私、艦魂だから親は居ないんです。
だから、お父さんが居たら……………
大佐みたいな感じだったのかなって」

恥ずかしそうに微笑むキエフ。

「……………フツ、いいだろう。
私を『お父さん』と呼んでくれ」

「……………はい。……………お父さん」

その瞬間、ガガノフの心の奥底から
熱いものがこみ上げてきた。

「……………『お父さん』と
呼ばれるのは、本当に久しぶりだ」

涙を流すガガノフ。

そんなガガノフから貫い泣きするキエフ。

「はい……………お父さん、一緒に
寝てもいいですか……………?」

「ああ。こっちにおいで」

左腕を伸ばすガガノフ。

その左腕の上に横たわるキエフ。

ガガノフが左腕でキエフを抱き寄せた。

「……………温かいです、お父さん」

キエフの目から再び涙が溢れる。

「……………お休み、キエフ」

軍人から1人の父親に戻った
ガガノフが優しく微笑む。

「お休みなさい、お父さん……………」

2人は安らかに目を閉じた——

その瞬間、『キエフ』は
凄まじい閃光を放ち、凄まじい
轟音を上げながら爆発した——

——ここは星の道——

光に包まれた天への道を
楽しそうに歩く父娘。

——お父さん、私ね、お父さんと
一緒に行けて嬉しいよ——

——そうか、父さんも嬉しいさ——

——ねえ、向こうにはお母さんや
私のお姉ちゃんも居るんだよね？——

——ああ、妻は大の子供好きで、
イリーナは妹を欲しがっていたから
きつとお前を気に入るさ——

幸福のみがその場を包み込む

星の道を歩んで父娘は天へと昇った――

爆炎を上げながら大海へと
没していく『キエフ』。

その様子を見守る瀧と鳴実。

「……………勝った……………のか？」

「……………ああ、俺達の勝ちだ」

2人は黒煙が立ち上る海を見つめた。

――
1
2
話
に
続
く

No. 11 昭和編第11話『キエフ、大海に没す』（後書き）

大海に没したキエフ。

彼らの存在を忘れてはなりません。

No. 12 昭和編第12話『富獄完成、そして……』

ここは日本本国の大本営。

先日の『キエフ』の攻撃により
弾薬と燃料を余計に消耗した
帝国海軍はアメリカ侵攻を中止。

大和の国の興亡は、その全てが

以前、極秘裏に創設された
帝国空軍の『富獄計画』に委ねられた。

「————大島君、有栖君。
実は君達にどうしても託びなければ
ならん事があるのだ」

山本五十六大將が2人に頭を下げる。

「え!?! あ…………あの……………」

あの『軍神』山本五十六が自分達に
頭を下げる程、重大な事が
起きてしまったのだろう。

「実は、我が海軍の一部の者が
極秘裏に原爆を開発していたのだ」

———原爆———

その単語は未来の男2人を
戦慄させるには充分な力を有していた。

「……………あれは……………開発を……
禁じて……………いた……………筈です」

一瞬、目眩がした。

「……………有り得ない……………」

—— 一方、呉では——

ここは戦艦『比叡』の一室。

部屋の隅にあるベッドの上で
患者着を纏い、横たわる比叡。

そして榛名がベッドの横で
リングを切っている。

「…………… はい、どうぞ」

いわゆる『リングのウサギ』である。

「まあ！榛名ったら器用なのね」

「……………ッ……………」

比叡は唯一無二の姉、金剛を失ったばかりである。

もっと悲しんでもおかしくないのだ。

それなのに、家族である妹達にさえ涙を見せようとはしない。

そんな比叡の姿が、かえって痛々しい。

その時。 「お邪魔します」

部屋の中に花束を抱えた大和と

何故か付いて来た雪人が現れる。

「まあ、大和ちゃんに雪人ちゃん」

雪人は明るく振る舞う比叡の姿に
ショックを受けたが、それを隠す。

(……………比叡さん、やっぱり無理に
明るく振る舞っているよ)

(……………やっぱり。妹想いの人だから)

雪人と大和との間で初めて
アイコンタクトが成立した。

「何を話しているんです？」

比叡が2人を怪しげに見つめる。

「い、いえ、何でも……アハハハ」

早朝、中島の航空機工場の格納庫から
今までにない轟音が轟く。

そんな中、格納庫から離れた原っぱで
瀧と鳴実はその様子を見守っていた。

「いよいよ、初飛行か………
ナルミ、これで良かったのだろうか」

「……………さあな。分からんよ、タキ。
……だが、1つだけ言えることが有る」

格納庫のハッチが開かれる。

「自分以外の考えを認めない者は
この世に存在してはならないのだ」

ハッチが完全に解放され、『それ』は生まれて初めて朝日の光を浴びた。

「そうだな……この世界の人類を1つに纏めなければ、奴らには………勝てないんだな。ナルミ」

B-29を凌ぐ巨体がハッチから這い出る姿は必死に朝日の光を求めているかのように見えなくもない。

「ああ……その通りだ、タキ。
………今、それを……あの機体に……
………『富獄』に託すのだ」

『富獄』の鉄の翼にぶら下がる6発のジェットエンジンが唸り声を上げる。

「———頼むぞ、富獄」

その巨体がジェットエンジンの
唸り声と共に朝日に照らされながら
天へと舞い上がっていく姿は
天使を連想させた。

（技術者ならではの連想ですので
お気になさらないで下さいへへ；）

場面は再び呉に戻って。

前より柔らかくなった表情で
榛名や霧島と談笑する大和。

「ちょっとよろしいですか？」

突如、凜とした声が聞こえる。

声がした方を向くと、そこには
眼鏡を掛けたポニーテールの少女が居た。

「……………あなたは……………?」

大和がきょとんとしていると
突然、榛名と霧島が敬礼した。

「そんな堅苦しい挨拶は要りませんよ」

優雅に微笑むポニーテール。

「お初にお目にかかります、

私は長門型戦艦1番艦『長門』の
艦魂、長門です。以後お見知り置きを」

長門の優雅な雰囲気に見とれる大和。

「大和さんこうして、
ちゃんとお話するのは初めてなので
よくは知らないのですが……………」

他の艦魂達との交流はいかがですか？」

「……………はい、榛名さんや
霧島さんとは、さっきみたいに

楽しくお話出来る位に」

長門が嬉しそうに微笑む。

「ならば、どんどん他の艦魂達とも
交流の輪を広げて下さい。
私も出来る限り協力します」

その頃、空母『赤城』では――

「……………何だ、この男は……………」

飛行甲板に横たわる緑髪の青年。

彼の体に触れて大体の分析を試みる。

「……………なっ……………」

……………そ、そんな馬鹿な!？」

――第13話に続く

No. 13 昭和編第13話『奇妙な来訪者』(前書き)

作者「本編は暫くお休みにします」

武蔵「だけど、読者さんに退屈なんて
させないよ!! 何故なら……………」

赤城「外伝が始まるからだ!!」

金剛「我らに1人1つずつ外伝を
書いて下さるそうだ」

作者「時間はかかりそうですが…………」

謎の少年「何せ、後少しで昭和編も
クライマックスだからね。
補完もろくに無いまま次に行くことは
読者様が許して下さらない」

作者「ネタをバラすなあああ!!!!」

No. 13 昭和編第13話『奇妙な来訪者』

——ここは、『赤城』内部——

艦魂達でさえ普段使わない、
かなり広めの会議室に

普段、なかなか揃わない艦魂達が
ほとんど揃っていた。

それはまるで転入生を紹介する
クラスのような雰囲気である

・艦魂達の新能力紹介

本作の艦魂達は、その意識の一部を

立体映像として遠くに転送可能。

ただし、あくまでも映像なので
転送先の物質に触れる事は出来ない。

意識転送中は本体が無防備になるという
重大な欠点を抱えており、

余程の事が無い限り、この能力は
絶対に使用してはならないという
掟が艦魂達の間で定められている。

「……………で、ソイツが甲板に
倒れていたっていう男？」

酔っ払いの加賀が、緑髪の青年を
見つめながら赤城に問い掛ける。

「そうだ。彼の身体を分析した結果、魂を構成する物質から人間では無く艦魂である事が判明した」

赤城の言葉で会議室がどよめく。

無理もない。艦魂は少女の姿をしているのが普通なのだから。

「だが、肝心の本体が見つからない」

これも、どよめきを招いた。

何故ならば、艦魂は本体である艦からそんなに遠くの場所には行けないからだ。

（ちなみに本作の艦魂の行動範囲は

最大で半径5キロメートルという設定)

だから遠くても半径5キロメートルの範囲内に本体が存在していなければならぬのである。

「本体が無いとなると、幽霊かしら」

飛龍が顎に手を当てる。

「それは有り得ない。本体を失った艦魂は必ず幽体物質を持つはずだ。だが、この青年からは幽体物質は現れていないのだ」

——本体を持たず、命を持つ艦魂——

この不思議な艦魂は、自分の名前も含め殆どの記憶が残っていないそうだ。

「あの……………赤城さん」

大和が手を挙げる。

「何だ、大和」

「色々あるとは思いますが、彼を
我々の所で保護してはいかがでしょう」

大和の言葉に周りの艦魂達は
驚きを隠せなかった。

「彼にしてみれば、記憶をなくした上
見知らぬ場所にただ1人、
放り出されたようなものですから」

「……………そうだな……………」

確かに大和の発言には一理ある」

赤城が表情を和らげる。

「この男に部屋を与える」

――

「……………で、その人が

ここ（大和）に居候しているの？」

昼食の握り飯をかじりながら

大和に問い掛ける雪人。

「ええ。とても大人しいのよ」

――――2人は……否、艦魂達は

知る由もなかった。

——迫り来る、大いなる厄災に——

——本国・大本営——

山本五十六が瀧と鳴実の部屋に入る。

「大島君、有栖君。聞いてくれ。
海軍の反逆者達の件だが……………
幸いにも原爆は1発しか
製造されていないそうだ」

山本の言葉に安心したらしく
安堵の表情を見せる瀧と鳴実。

「1発しかない原爆だが……………
私は、アメリカの原爆製造施設の
破壊に使いたい」

山本の言葉に2人は顔を上げた。

「……………もう二度と原爆は造らせないと約束する。

だから、これだけは譲ってくれないか」

山本の眼に偽りの色は見当たらない。

「……………どうしても、ですか」

縫るような目で山本を見つめる瀧。

「……………分かり、ました……」

未来のために苦渋の決断を下した瀧。

戦争終結の手段を核に頼る行為は

決して許されるものではない。

だが、そうせざるを得なかった
青年の存在を忘れてはならない。

ここは『大和』内部。

「ねえ、翡翠君」

大和が緑髪の青年に話し掛ける。

「どう？ ここには慣れたかな？」

青年は穏やかな笑みを返した。

「うん、楽しく過ごしているよ。
それに大和さんが付けてくれた名前、
とても気に入ったよ」

青年と楽しそうに話す大和の姿を見た
雪人は胸に痛みを覚えた。

「……………」

（何故だろう？翡翠が大和と話しては
いけない理由なんて無いのに
すごく嫌な気分になるのは……………）

本国・大本営では山本五十六による
日の本の国の未来を懸けた大博打が
徐々に計画として形作られていた。

「アメリカの原爆製造施設を核攻撃後、ワシントンに私の座乗する富嶽を飛ばして、原爆投下中止と引き換えに無条件降伏を勧める」

山本五十六の言葉に瀧と鳴実は自分自身の耳を疑った。

「ちょっと待って下さい、原爆は……」

山本が大きく頷く。

「ああ。原爆は1発だけだ」

瀧と鳴実——否、タキとナルミはこの瞬間、彼の大博打の意味を理解した。

（アメリカを相手にハッタリをかける気なのか、彼は!?!）

No. 13 昭和編第13話『奇妙な来訪者』（後書き）

作者「記念すべき外伝第1号ですが、その主人公は大和です！」

大和「えっ、私！？てっきり大島さんや有栖さんかと思ったけど……………」

作者「外伝は艦魂達の為に作った企画小説だからね。彼らのエピソードは最後あたりになるだろうね」

大和「…………成る程。…………それでは！」

作者「外伝でお会いしましょう！」

No. 14 昭和編第14話『富嶽、アメリカの蒼空を舞う』(前書き)

作者「久々の本編&改めてあけおめです」

大和「あけおめです」

武蔵「雪人の作ったお雑煮おいひい」

雪人「ありがとう、2人とも
美味しそうに食べてくれて」

金剛「食べ物ばかりに囚われていないで
お正月のお約束のアレを貰うぞ!」

作者「何か嫌な予感……………」

艦魂達「お年玉ちょーだい☆」

作者「やっぱりいいいいいい!!」

No. 14 昭和編第14話『富嶽、アメリカの蒼空を舞う』

闇夜に響く唸り声。

それは獣の類のモノではなく、

帝国空軍初の大規模な飛行場に響く
60発のエンジンが発するモノだった。

これから巨重の天使達は遙か彼方の
アメリカへと攻め込み、

工業力を大幅に削ぎ落とす
『イズモ作戦』を敢行する。

そんな彼らを見守る瀧と鳴実の
そばに歩み寄る男が居た。

「山本長官……………」

山本は瀧と鳴実を労うような
笑顔で2人の肩を叩く。

「大島君に有栖君。よくやってくれた。」

・
・

富嶽が12機もあれば充分やれる」

——此処はアメリカの某兵器工場——

朝日が海面から姿を現し、
1日の始まりを告げる。

その様子を眺めている労働者の青年は
微笑みを漏らさずにはいらなかった。

朝日が放つ美しい光から元気を貰い、
マシンオイルまみれの職場を耐え抜く。

それが彼の日常なのだが……………

それは機械の唸り声で崩壊した。

「……………?」

空を見上げると、巨大な航空機が
10機ほど、編隊を組んで
蒼空を舞っている姿が目に入った。

なんと、巨大な機体なんだろう。

鉄鳥への憧れは次の瞬間、
悪夢へと変貌を遂げる。

翼に大きく書かれた巨大な日の丸。

この時代でアメリカに、それを付けた
航空機が現れる事が何を意味するか。

「————日本軍の空襲だっ！！！」

6個の心臓を抱えた怪物から炎の悪魔が
群を成して降りてくる。

それらは、工場の屋根をぶち破り
中を炎の地獄へと変えていった。

「……………俺は夢を見ているのか」

日本の技術力を侮っていた訳ではない。

むしろ、兵器を造る者として

それらに対する敬意を秘めてさえいた。

………しかし！

まさか、これほどの大型機を建造して
空襲を仕掛けてくるとは！？

しかし、アメリカを揺るがす衝撃は
それで終わりを告げはしなかった。

ホワイトハウスのルーズベルト大統領に
更に衝撃的な知らせが入ったのは
それから十数時間後の事だった。

ニューメキシコ州北部に位置する
ロス・アラモスが壊滅したというのだ。

それも過去に例を見ない
規模の被害を被ってだ。

「……………何だと……………! ?
……………あそこは、確か……………」

ルーズベルトが喘ぐように言葉を紡ぐ。

知らせを持ってきた軍人も
冷や汗で顔を濡らしている。

「……………はい。マンハッタン計画の為に
設立した研究所が……………」

「な、何という事だ……………」
日本軍の連中は……………一体どんな手を
使って……………も、もしや!？」

……………

『過去に例を見ない規模の被害』

その言葉から米国の頭脳は、
1つの結論に到達した。

「……………生存者達の証言からして
原子爆弾に間違いありません」

その言葉が大統領の胸を締める。

「ぐ……………ぐううつ……………」

強大なるアメリカが日本軍如きに

遅れを取るなど、許されない。

だが、こうして本土を攻撃された上に

切り札である原爆の開発に必要な
数多くの人材までも失った。

その悪夢が彼を押し潰そうとしている。

「しっかりなさって下さい、大統領！」

軍人がルーズベルトに駆け寄るが、

老いた肉体がこの重圧により
ぺちゃんこに押しつぶされるのは
もはや時間の問題であった。

ルーズベルト亡き後急遽、副大統領から
大統領に就任した時の人
ハリー・S・トルーマンの元に

大日本帝国海軍大将であり、
帝国海軍連合艦隊司令長官でもある

山本 五十六からのメッセージが
届いたのは、ルーズベルトの死後から

3日後のことであつた。

内容は至ってシンプル。

講和を受け入れる事を求めるものだ。

そして、メッセージの最後に

日本軍がワシントン上空に
『フガク』なる戦略爆撃機を
待機させている事が記されていた。

「……………おのれ、ヤマモトめ！」

講和を取るか。それとも死を取るか。

アメリカに残された選択肢は
その2つだけであり、そのどちらかを
選ぶかはハリー・S・トルーマンに
託されたのであった……………

ここは戦艦『大和』の会議室。

帝国海軍の天翔る最精鋭部隊、
空母機動部隊の艦魂達と

南太平洋の諸島に対する侵攻作戦で
陸軍を支えた戦艦部隊の艦魂達が
集まる中、金剛の遺志を受け継いで

戦艦部隊の司令長官職を拝領した
大和が1枚の紙を広げる。

「先刻、アメリカ政府からの返答が
届きました。トルーマン新大統領は…

講和を受け入れるそうです」

大和の言葉で会議室が震えだした。

歓声を上げる者も居れば、

抱き合って泣く者や

雄叫びを上げる者も居た。

———その夜———

艦魂達が終戦を祝うパーティーで
ドンチャン騒ぎする中、

大和と雪人は甲板に出ていた。

「ようやく戦争も終わったね、大和」

雪人は今までに見せなかった
安らかな笑顔で大和を見つめる。

「ねえ、神谷君は……………
これから……………どうするの？」

雪人とは対照的に大和は
声がどこか震えていた。

「ん？ そうだね。先ずは1回家に
帰って思い切り親孝行したいなあ」

「……そ、そうね。ご両親に
今まで苦労掛けた分親孝行すると
良いわ。ご両親もきっと喜ぶよ」

大和の言葉に雪人は幸せそうな
笑顔で応じたのだが、

雪人は気付かなかった。

自分の幸せそうな笑顔が
目の前の少女を傷つけていることを。

甲板で独り泣き崩れる大和を見て
一番驚いたのは赤城だった。

「大和、どうしたのだ!？」

今や戦友と呼べる仲の赤城が
大和のそばに駆け寄る。

大和は溢れる涙を必死で止めようと
するが、到底無理だった。

「……………み……………神谷君……………が……………
……………ひつく……………えつく……………」

その言葉を聞いた途端、赤城の
端正な顔が憤怒の形相に変わっていく。

→
バックに仁王が居るが、気にするな。

「あの男め……………!!」

雪人は部屋の共同ベッドで
寝転がりながら考え事をしていた。

（何で大和はあんなに悲しそうに
していたんだろう……………？）

その時。

雪人の神経が迫り来る恐怖を感知した。

ズシン、ズシンと迫り来る足音。

「……………なっ!？」

足音が止まったかと思うと
部屋の扉が開け放たれ、

目も眩むような迫力と全身に漲る
恐ろしいまでの力強さを身に纏い、

そして三界（天国・人間界・地獄）を

震え上がらせる怒りの形相を浮かべた

金剛力士が部屋に入ってきた。

「ひ……ひiiiiiiiiiiii!!」

憤怒の形相を前に動けない雪人。

「……よくも……大和を……」

「……………え？」

聞き覚えのある声に驚く雪人。

「よくも大和を泣かしたなああ!!」

赤城の日本刀が雪人の胸を掠る。

「何と………!!? 許せ、神谷………?」

雪人は赤城の殺気に圧されて
失神状態に陥っていた。

「神谷、起きろ!」

赤城が雪人の頬をビンタするが
効果は全く無い。

「赤城さん。ちょっと貸して下さい」

赤城が退いた場所に立った大和が
深く息を吸うと同時に右手に

炎が灯り始めた。

次の瞬間。

「バチイイイイイイイイン！」

強烈なビンタが雪人を直撃、
4～5枚の壁で隔てられた部屋まで
壁を破る形で放り出された。

「……………やりすぎたな」

「はい……………反省します……………」

———第15話に続く

No. 15 昭和編最終話『未来へ』 (前書き)

作者「ついに昭和編もクライマックスになりましたね。皆さん」

大和「長かったような、短かったような……………」

武蔵「作中での経過時間は1年程度。それを……15話に無理矢理収めた訳ね」

作者「省いた部分は外伝で書くから問題は無いよ。安心してね」

赤城「ふむふむ、大島が失禁しかけた『あの事件』も出るのか……………」

翔鶴「……………ぽっ」

蒼龍「……………男子諸君。聞いて驚かないでね。雪人君ったら

自覚しないで他の艦魂達のハートのツボを押しまくってるのよ」

飛龍「……………ペットにしたい」

瑞鶴「ハアハアハアハア……………」

加賀「何かヤバくな〜い？」

作者「……………対策を練っとくよ」

雪人「すみません、遅れました」

作者「あ……………ヤバッ」

（獣と化した6人の空母が雪人を襲う）

雪人「作者さん助けてええええ」

作者「ほお、これは大胆な……………」

武蔵「見ていて楽しい〜!!」

大和「嗚呼…………切なげな桃色吐息…………
その表情…………少し細めの身体が…………
露わになって…………ハアハアハア」

雪人「3人の裏切り者———!!!!」

――5分後――

作者「貞操の危機だったね、ハハハハ」

雪人「……………これは何ですか」

（大和から借りた着物&カツラ）

武蔵「ロングヘアーの雪人ちゃん
可愛すぎる〜〜〜!!」

大和「ずっとその格好でいて!!」

雪人「そんなんっ!!」

作者「破られた服の修理が終わる迄
その格好で居てもらうよ」

金剛「話がだいぶ逸れているぞ？」

比叡「私達4姉妹や金剛姉さんと
赤城さんの対立もありますよ」

榛名「自分は少し恥ずかしいであります」

霧島「外伝楽しみにしてるよ」

作者「ああ。任せとけ」

No. 15 昭和編最終話『未来へ』

.....ここは.....？

そこは、闇に支配された世界だった。

———君は受け入れるか？

優しく、聴く者を安心させる声が
闇の沈黙を破って放たれる。

———艦魂は死ぬために存在すると

声は鋭さを増していく。

.....分からない.....

——死ぬのは嫌かい？

………これでも、軍艦ですもの……
死ぬことは承知しています

——それは、死の宿命を
受け入れたも同然だよ？

理由を聞かせてくれるかな？

………分からない………

——なら、何故君は死の宿命に
従うことが出来る？

………分からない………

………分からない………

………分からない………

………分からない………分からない………

………分からない、分からない、

分からない、分からない………

「——ハッ!？」

気が付くと目の前に男の胸板が在った。

それが数秒後には雪人のものである事に
気付き、顔を赤らめる。

「いけない、私ったら…看病の途中で
寝てしまった………」

赤城に斬られた傷口には

包帯が巻かれており、一見

負傷兵に見えなくもなかった。

………本当は軽傷なんだけど

アメリカが講和を受け入れて3日後。

アメリカと正式に平和条約を
結ぶ使節団を乗せた『武蔵』と

それを警護する『大和』は
ハワイの沖合を航行していた。

その甲板で蒼空を眺める雪人は
水面に2人の人魚を見つける。

「ふはぁー！」

「やっぱり泳ぐのって最高！」

大和の水着はスクール水着なので
まだマシな方だ。……………多分。

しかし、武蔵の方は……………
かなりセクシーなビキニである。

瀧と鳴実が未来から持ってきた
グラビア誌によってもたらされたのは
言うまでもないだろう。

だが、雪人はビキニの侵入を許す
隙すら見せていない。

「……………」

原因はもちろん大和の涙である。

その時、突然目の前が暗くなり
目を凝らした雪人はまたしても
鼻から吐血、失血死寸前になった。

純白のビキニによって強調された
武蔵の美しい体が雪人を圧倒したのだ。

「ぐふふふ………隙だらけ☆
食べちゃおうかな」

完全に獣と化した武蔵が雪人に
襲いかからんとしたが、

大和が止めに入らない事を
不審に思い、後ろを振り返ると

アジア人特有の2つの黒真珠が
蒼い空を睨んでいる。

「―――!？」

蒼空に浮かぶ黒点が敵襲を告げるのに

そう時間は掛からなかった。

「敵襲です！武蔵、本体に戻って！」

「オッケー！」

本体の艦橋で最も高い防空指揮所に立ち、刀を抜く姿は武人そのものだ。

「……………アメリカ軍の機体……………」

大和達は知る由もなかった。

頭上の機体が、アメリカ政府の意思に逆らって行動を起こした

反政府勢力の将兵に操られており、

その中の1人が最愛の艦を失ったパイロット、ジョン・スミスであるという事実を———

「低能なイエローモンキー共め……」

無能なアメリカ政府に代わって、
俺達が貴様等を海底に叩き落とす！

貴様等がレベツカにしたようにな！！」

コルセアの逆ガル翼がジョンの怨念に
応えるが如く、揺れる。

「うおおおおおっ！！」

大和と武蔵に叩き落とされる僚機の数が増えていくにつれ、それは
弱まるどころかより一層
激しさを増していく。

「ジャアアアップウウウ!!!!!!」

その瞬間だった。

大和が光に包まれたのは。

そしてジョンの意識も白熱した――

――

――西暦2120年・南太平洋――

・
・
・

それらは深紅の粒子で3本の筋を
引きながら蒼空を飛んでいた。

そのコクピットで欠伸をしたのは

国連軍南太平洋方面部隊所属第3小隊に
所属するモビルスーツパイロット

リナルド・ケーニッツ少尉だった。

「今日は敵さん、居ませんね」

「不謹慎だぞ、少尉」

退屈そうに呟くりナルドを叱る
部隊長のハワード・メイソン大尉。

その時。国連軍総司令部からの通信が
コクピットに入り込んできた。

「総司令部!？」

通常なら地方司令部、前線基地を介して
下される命令が、それらを飛ばして

直接、前線のパイロットに
下されようとしている。

それだけ重大な事が起きたのだと
察したハワードの顔が引き締まる。

すぐさまスクリーンに国際連合の
総長にして国連軍の最高司令官である

マリア・ジェーン・ワトソンの
凛とした顔が映し出される。

「そちらから20キロ離れた海域に
反国連勢力の大型艦が確認されました。

直ちに撃沈しなさい。」

通信が切られた後にはパイロット達の
緊張した表情がコクピットのモニターに
映し出されていた。

「総司令部直々の命令だ。
気を引き締めてかかれ!!」

3機の『ジックス』は
目標をしとめるべく、飛翔した――

雪人は一瞬何が起きたのかが
分からなかった。

「……………敵機が消えている」

頭上に迫っていた逆ガル翼は
1羽も見当たらない。

それよりも――

「……！……まど！………大和！」

大和が意識を取り戻すと、そこは
雪人の腕の中だった。

「———！？」

雪人の安堵した表情が大和を熱くさせる。

「神谷君……………」

その時。

何かが飛来する音が
幸福な時間を踏みにじった。

「申し訳ありません……………」
独断で時空移転装置を使用しました」

うなだれる瀧の肩を優しく叩いたのは
『大和』艦長の有賀 幸作大佐だった。

「君はよくやってくれた」

その時。

何かが飛来する音が艦橋に響くと同時に
瀧と鳴実が震撼する。

「……………聞き覚えがある……………！」

「まさか、あの音は……………」

—————

大和は見た。

身長20メートルはあるに違いない
人型の兵器。

胸からX字状に配置された
粒子発生装置。

青白いカメラアイがX字状に
配置された頭部。

先行していた1機が銃を構え、
ビームを放ってくる。

その紅い光弾が『大和』右舷を
穿った瞬間、新たな苦痛が彼女に

容赦なく襲い掛かった――――

「はぐううう！？ひ、ひぎいいいやあ！」

腹の右側が溶ける苦痛に耐えられず、
自分のものとは思えない叫び声を放つ。

「や……………大和オツ！！」

雪人は大和を抱き上げて医務室に
向かう道を走り始めた。

その途中で『大和』が揺れる度に

大和が叫び声を上げ、握り締めた
拳から赤いモノが滴り落ちる。

「大和……しっ……！」

こうして声を掛けるしかない自分の無力さを呪う雪人であった――

――

艦橋では未知の敵に対して頑なに抗おうとする帝国海軍将兵が

指示を飛ばし、それを受け、必死に対応していく姿があった。

大和の広角機関砲が火を放つが悉く回避され、頑丈な装甲に弾かれる。

「まだまだ！」

自慢の46センチ砲弾が大気を切り裂き、
巨人の1機を喰らおうとした――――

「ドガアアアアアアン!!」

爆炎が収まった後、艦橋は沈黙した。

「……………効いていない」

こちらの絶望感を感じ取ったのか、
敵機が4つの眼を光らせる。

そしてライフルの銃口を
艦橋に向けてきた。

最早これまで――――

皆がそれを脳裏に浮かべた瞬間、

オレンジ色のビームが敵機の腹を貫き、巨人を絶命させる。

続いて第2射が巨人を穿ち、

残った巨人が逃げていく様子が艦橋の目前で広がっていた。

暫くして、スナイパーライフルを背中に抱えたモビルスーツが大和の前方に現れる。

『『大和』の皆さん。我々は反国連武装勢力『エコーズ』です。

間もなく我が方の艦隊がこの海域に参りますので、

そちらの案内に従って下さい』

何が何だか理解出来ない様子の帝国海軍将校達とは対照的に

喜びに満ちた表情の瀧と鳴実。

「やったな、タキ……目的の第1段階は
しっかり果たせたようだ」

「ああ……国連に立ち向かう人々が
現れてくれたようだ……」

———第16話に続く

No. 15 昭和編最終話『未来へ』 (後書き)

謎の少年「遂に『未来編』に
到達したか……………時は満ちた」

謎の青年「マスターが私にお与えに
なられた艦を出しますか？」

謎の少女「許可を!!」

謎の少年「まあ待ちなよ。このまま
叩き潰してもつまらないしね」

N o. 1 6 未来編第1話『擦れ違う想い』(前書き)

作者「今回は未来編第1話という事で
長めに書きましたよ」

雪人「大島さんと有栖さんの本名
長すぎますよ！頭が爆発しそうです！」

長門「今回は未来の艦魂が多めに
登場しますので注目ですよ」

No. 16 未来編第1話『擦れ違う想い』

「これが未来の艦か……………」

反国連武装勢力『エコーズ』の誇る
『愚連艦隊』の旗艦が目の前にあった。

流石に22世紀という事もあり、
ステルス性は最早常識と化した世界だ。

平べったい印象を与える艦体のせいで
大和並みの巨大が弱々しく見える。

「外見に惑わされてはいけません。

この『百合洲』は艦体の内部に
砲塔やミサイル発射装置を
隠し持っているのですから」

誇らしげに説明する瀧。

「……………ミサイル？」

昭和の世界では使わなかった単語に戸惑う帝国海軍将校。

「発射と同時に敵を自動追尾する誘導式ロケット弾です」

「おおっ！？この未来の世界にはそんな凄い兵器があるのか！？」

瀧の返答に興奮した海軍将校が感嘆を漏らすのを見た瀧は

先日の件に関係する事を持ち出した。

「この間、お話した垂直離着陸機も

もっと高性能なものがありますよ」

そう言って微笑む瀧。

エコーズの艦隊を率いる旗艦の
艦魂、ユリ（百合洲の愛称）は

目と鼻の先の巨大戦艦を見つめていた。

「ユリ司令、やはりアレにも？」

『百合洲』級ミサイル巡洋艦の
2番艦『榛名』の艦魂であり、

ユリの参謀を務めるハルが
司令に問い掛ける。

「ええ。私達の同胞が居るわ」

「少々緊張されているように
見受けられます、ユリ司令。

………いえ、姉上」

ユリは元々は妹のハルと共に
日本の国防海軍に籍を置いていた者だ。

10年前、日本政府による対中政策の
一環として開発が始まった
最新鋭ステルス巡洋艦であり、

ハルが進水した頃から日本政府は
国連の傀儡と化しつつあり、

国防海軍の有志達は艤装中の
ユリ達姉妹も含めて護衛艦隊ごと
エコーズに合流したのだ。

その後エコーズの手により完成、
旗艦を務めるようになってからも

日本という国のあらゆる文化に、
そして……かつて欧米列強を
震撼させた守護神達に対する
敬意は変わっていない。

その守護神が目の前に居るのだ。

緊張するのも無理はあるまい。

「どんな方かしら……………」

意識を取り戻すと同時に右腹に
激しい痛みが走る。

「ひびいてっ!？」

「大和……！まだ鎮痛剤が効いていないのか……………」

（……………神谷君……………）

ふと見ると雪人の腕に所々噛まれた跡があり、まだ新しい。

（まさか……………私が……………）

「……………ごめんな、大和……………」

予想外の言葉に大和は泣き出した。

乗っている人々を護るのが艦魂の役目である。

それを逆に傷つけてしまった。

しかも、よりによって好きな男性を。

大和の涙に衝撃を受けたのか、
雪人の堤防も決壊し、涙が溢れ出した。

互いに大切な存在を護れない
己自身の無力さを嘆いて――――

――――

アメリカの旧国防省の建物に存在する
国際連合軍総司令部。

そこに飛び込んだ報告は
実に驚くべき内容であった。

まるで大和が襲撃される事を
事前に察知していたかのように

エコーズが近くの海域に潜んでいたのだ。

「……………一体、何故？」

国連の人々は気付かなかった。

この時代と過去のどちらにも
属さない異なる次元の存在に。

—————

『百合洲』率いる愚連艦隊に
護られながら『大和』が導かれたのは

南の孤島であった。

『あれが我々エコーズの誇る極秘拠点
サン・トンプソン基地です』

『百合洲』艦長の戸高 賢司大佐が
通信機を介して、こちらに語りかける。

「基地？単にデカいだけの島ではないか」

有賀大佐が疑問を口にする。

「それがですね……あれをご覧下さい

この基地の存在が敵に知られていない
理由がよくお分かりになるでしょう」

まるで戸高大佐がそう言うのを
待っていたかのように島の崖が割れる。

「おおっ!？」

艦隊丸ごとが入れる程の
巨大な穴が現れた。

「あの中にお入り下さい」

愚連艦隊と共に穴に導かれる『大和』。

穴が閉じると同時に浮遊感が
彼らを襲った。

「何が起こった!？」

「わ、分かりません!」

初めての経験だらけだから
『大和』の将兵達が慌てふためくのも
無理は無いだろう。

「ご心配なく。水位エレベーターです。

この水位エレベーターは、艦船を収めた後、エリア内を密閉して

水を注水・排水することで高さの違うエリアと行き来するものです」

戸高大佐の説明は帝国海軍の将兵達を唸らせる。

暫くして、扉が開かれると

そこは1億ドルの価値がありそうな

自然と科学が調和した美しき都市が辺り一面に広がっていた。

「地下1キロに存在する、巨大な地下都市型軍事施設……………」

これがサン・トンプソン基地です」

基地の特殊ハンガーに収納される
満身創痍の『大和』を見つめる

帝国海軍の将兵達。

「『大和』は我々エコーズの技術で
近代化して戦闘能力を向上させます。

心配無用、優秀な船大工ですよ」

帝国海軍の上級将校達は『大和』の
代表としてエコーズの代表達と

面会するべく、広めの会議室に居た。

「まだなのか……？」

「もう20分は経つぞ！」

既に20分は待たされており、
苛立ちが募りつつあった時。

扉が開かれると共に爽やかな
雰囲気の軍人が現れた。

「大変お待たせして申し訳ありません

私はエコーズの総司令官、
ケネス・ジョージ・マキハラです」

ケネス個人の謙虚な心と

総司令官の威厳が見事に融合した

美しい敬礼をしてみせる。

「『大和』艦長の有賀 幸作大佐です」

有賀と、その参謀達が敬礼する中

会議室に2人の男が現れた。

「改めて紹介しましょう。

タキ・ハワード・オオシマ技術少佐と

ナルミ・アレックス・アリス技術少佐」

本名をフルネームで呼ばれた

タキとナルミは日本国防軍の軍服を
完璧に着こなしている。

「……………名前から察するに、
君達はハーフのようだが……

何故、我々日本軍に協力したのだ？」

有賀の参謀がもつともな疑問を口にする。

「私が元々居た世界では、

アメリカが日本を見下す形で

関係が成り立っていました……………

ですから、未来を日米両国が

対等に付き合える世界に変えたいと

思っ、日本軍に味方しました」

タキとナルミの眼に宿る

揺るがぬ意志の炎を見た有賀は

静かに微笑んだ———

雪人が大和に呼ばれて彼女の
部屋に入ると、そこには———

「————その格好は————」

————日本国防軍の軍服を纏った
大和の姿が在った。

だが、何よりも目を引いたのは
短くした髪であつた。

「神谷君。私はもう女の子じゃない。
だから、護ろうとしなくていいわ」

健気に微笑むショートヘアに
雪人は何も言えなかつた————

「……………分かつたよ……………」

熱い感情を無理矢理、隅にねじ込んで
何とか笑顔を作ってみたものの、

自分でも情けないくらい
引きつっているのが分かる。

そのまま何も言わずにドアを開けた。

暫くして板が戸口に軽くぶつかる
音と共に大和はその場に座り込んで
声を押し殺しながら嗚咽を漏らす。

雪人は怒りに震えていた。

己自身の不甲斐なさに。

自分にもっと力が在れば、大和は
髪を切らなくても済んだのだから。

その時、ふとある事を思い出したのか

ナルミの部屋に向かって走り出す。

モビルスーツ用バンカーに
納められた『それら』は

新しい電気製品特有の
匂いを漂わせていた。

「これらは、我々エコーズが大型艦の
専用艦載機として開発した機体群だ。

左側の機体は、砲撃戦タイプで
体の前方に備え付けられた4門の

大出力ビームキャノンによって
過去に例を見ない攻撃能力を持つ。

但し機動性は比較的、低いから
母艦に残って移動砲台として
戦うのが主な戦法である。

右側の機体は高機動タイプで、
強力な火砲は持たないが

中距離武装のビームライフルと
近距離武装のビームサーベルを

備えている上に防弾性の高い
シールドも持っているから

艦上戦闘機のように母艦から離れた
敵を叩くのに向いている」

教官の説明を熱心に聞いている
モビルスーツパイロット志願者達の中に
雪人の姿もあった――――

――――ここは南極海。

極寒の海に現れた黒い影。

オーロラのカーテンを見上げる少女。

——彼女は、国連軍が対エコーズ用に
開発した最新鋭の原子力潜水空母、

エンペラーシャーク級2番艦
『ティルピッツ』。

彼女は、今作戦の僚艦にして
同級3番艦の『ウリヤーク』と共に

南極海からエコーズの基地に
向けて侵攻中である。

襲撃する目標は南米の南部に
存在する補給基地。

エコーズは闇ルートで物資を
補給している様だから、この作戦は

エコーズの補給にダメージを
与えるだけではなく、

エコーズに物資を供給している組織に
対する威嚇の意味合いも含まれている。

「艦長、総司令部から暗号通信です」

通信士官の呼び掛けに反応する

『ティルピッツ』艦長、

ライアス・ヨハン・ヘルアー大佐。

「暗号解析、完了しました」

解析結果を受け取った

ヘルアー大佐は一呼吸置いて、

ブリッジのクルーにそれを伝えた。

「我々『ティルピッツ』は総司令部より
極秘任務を言い渡された。」

先日、南太平洋で発見された
反国連勢力の大型艦の搜索・撃沈だ」

『ティルピッツ』は、その巨体を
極寒の海に沈めた———

———第17話に続く

N o. 16 未来編第1話『擦れ違う想い』（後書き）

ユリ「未来編第1話はいかがでしたか？」

ハル「今年もこの作品を宜しくね」

作者「……………しまった！

容姿を書き忘れた……………！！」

ユリ「艦砲射撃用意。標的は作者」

ハル「オッケー！」

ズドオオオオオオン！！

作者「うぎゃあああああっ！！」

No. 17 未来編第2話『戻って来て』

以下、大和の大まかな改修点を述べる

1…最新型原子炉1基と擬似太陽炉6基を動力源として採用。

原子炉で作られた電気は艦内の生活電力及び擬似太陽炉への電力供給に使用され、

擬似太陽炉が生成した粒子は大和に搭載するビーム兵器や推進システムに使用される。

2…艦載機には新型モビルスーツを採用。

母艦の移動砲台として死角を
カバーする砲撃戦タイプと、

攻撃機として母艦を離れた場所で
戦闘を行う高機動汎用タイプを

4機ずつ搭載する予定。

3：武装の近代化ならびに
イージスシステムの搭載。

ミサイルや銃弾などの実体弾兵器と
ビームなどの粒子兵器をミックスして

搭載する事により、様々な状況に
対応可能な艦にする。

また、『百合洲』と同じ最新型の
イージスシステムを搭載する事で
対空能力を飛躍的に上昇させる。

「ちょっと待った。何で

擬似太陽炉が6基も必要なんだ？」

帝国海軍の将校がタキに訪ねる。

「擬似太陽炉は元々はモビルスーツの動力源として開発されたモノです。

これだけの大型艦を運用するには1基では無理がありますよ」

将校達とタキが談笑する中、ナルミは雪人のカルテをしかめっ面で睨んでいた。

「どうしたんだ、ナルミ」

「雪人君の心身に異常が見られる」

その言葉で笑みを消すタキ。

――

シミュレーターによって作り出された
仮想空間の中で対峙するモビルスーツ。

1機は国連軍のジンクス。

もう1機は雪人の『アイ』。

ジンクスがビームマシンガンを連射、
紅弾の群れがアイに襲い掛かるが

アイはそれを回避してビームライフルで
ジンクスのコクピットを撃ち抜く。

シミュレーターから降りた少年の顔に
表情はもはや存在せず、

単なる戦闘マシンになりかけていた。

「雪人君……………」

タキとナルミは、それを見つめるしか成す術はなかった。

――

基地より離れた海域に浮かぶ無人島。

その無人島で雪人達はエコーズの軍事演習に参加していた。

「……………」

無表情で標的を破壊するアイの双眼が招かれざる乱入者を視認したのは

演習開始から1時間が経過した時だった。

「……………国連軍」

アイの握ったライフルが、
それを睨みコクピットの雪人が
無造作に引き金を引く。

瞬く間に無人島を襲撃した3個小隊の
1つが雪人により生命を失った。

「―――！」

仲間の呆気ない死を目の当たりにして
冷静さを失った1機がビームサーベルを
抜刀、襲いかかってくる。

「……………ビームサーベル、起動」

アイのビームサーベルは正確に
ジnkスのコクピットを貫通した。

「――――ッッ!？」

パイロットスーツの特殊繊維が溶け、
身体に張り付いたパイロットの絶叫、

身体そのものを溶断されたパイロットの
生命の鼓動が止まる直前の断末魔が

ビームサーベルを介して聞こえてきた。

「あ……ああ………そんな……」

わなわなと震える自分の手を見つめる。

「僕は……僕は………!!」

しかし、大和の事を思い出すと
震えは徐々に自嘲へと変わった。

「……………ハハハハハ……………
……………情けないぞ……………神谷 雪人……………」

雪人は顔の神経を痙攣させながら、
ジnkスの胴を斬り裂いた。

「最近、雪人のヤツ何かを飲んでるな」

「ああ、強力な精神安定剤らしい」

アイ部隊のパイロット達が
そんな会話をしていた時。

「…………ハア…………ハア…………ハア…………」

雪人がふらついた歩調で
コクピットから出て来た。

「おい、大丈夫か？」

無理矢理作った笑顔で応えながら
自室へと戻っていく雪人。

雪人は自室のベッドの上で身体を
激しく痙攣させ、悲鳴をあげていた。

強力な精神安定剤を過剰に
摂取した結果、心身ともに
限界に近付いているようだ。

「……………うゝっ!？」

激しく咳き込み、暫くして口から
離れた手は赤黒く染まっていた。

「……………大和の為なんだ……………」

そこで雪人の意識は途絶えた。

――

気が付くと病室のベッドに
横たわる自分が居た。

「……………神谷君！　気が付いた？」

顔を上げると愛しい少女の泣き濡れた
顔が自分を見つめている。

「……………大和……………」

不甲斐ない、と自分を叱りつつ
立ち上がろうとした雪人を

大和の手が止めた。

「もう……止めて」

雪人が言い返すよりも早く

大和の紡いだ言葉が雪人を止めた。

「何かおかしくなっているよ、神谷君」

「……………!」

そこで大和が両手で顔を覆った。

「とても優しい本当の神谷君が
居なくなっちゃうなんて嫌だよ……」

大和の言葉が雪人の歪んだ心を
打ち碎き、彼が心の奥に押し込んでいた
感情を一気に引き出す。

大和を護れなかった時の無力感。

初めて人を殺した時に味わった恐怖。

それを押し隠す辛さ。

それが熱いモノとなって頬を伝う。

「戻って来て、雪人」

その時、雪人のダムが決壊、
そのまま大声で泣き出した。

雪人を優しく抱き締める大和。

「そうか。モビルスーツを降りるか」

ナルミは雪人から受け取った
書類を見て、そう呟いた。

「是非そうしなさい。君は人を殺すには
あまりにも優しすぎるのだから」

「……………はい！」

ここは大和の甲板。

「ねえ、雪人」

整備班の作業スーツを纏った雪人に
後ろから話し掛ける大和。

「整備班に転属したって？」

雪人はいつもの笑顔で頷いた。

「僕は、自分に出来る事で大和を支えていくことにするよ」

大和が安堵した表情を見せる。

「そう……良かった」

天使の笑顔が雪人を熱くさせる。

「—————!？」

思わず赤くなった顔を横に向けるが、顔全体が火照っているので意味がない。

「雪人って本当に可愛いなあ」

気が付くと、大和が自分の頭を
優しく撫でていた。

「――！？」

（何故だろう？ 恥ずかしいのに
こんなにも嬉しいのは？）

――第18話に続く

No. 18 未来編第3話『アトランティス』

雪人に下された新たな命令。

それは、『大和』を一時的に離れ、

エコーズの最新鋭原子力潜水艦

『アトランティス』に訓練士官として

乗り込む事だった。

当然、大和は浮かない表情になる。

「3ヶ月位で戻れるから、いつまでも膨れていないで機嫌直してよ」

「……………うん、待っているわ」

雪人は大和の肩を優しくたたき、
小型哨戒船へと乗り込んだ。

小型哨戒船が沖合まで進んだ所で
船員が何かの暗号を発信した。

——暫くすると哨戒船の近くの海面が
大きく盛り上がり、小さな水しぶきが
哨戒船を濡らす。

「……………でかい……………」

『アトランティス』の巨体に
圧倒され、呆然としていた雪人は
突然、引っ張られる感触を覚えた。

（早く乗って来なさいよ!!）

頭の中にそんな声が響いたかと思うと
『アトランティス』の司令艦橋部分に
1人の少女が腕を組んで、立っていた。

長い黒髪、アジア人特有の黒真珠は
見る人を間違いなく圧倒するだろう。

「あ……………」

南太平洋の海を進むアトランティス。

その艦内で研修を受ける雪人は
自分を見つめる存在が気になっていた。

（……………艦魂かな？）

「神谷訓練生、聞いていますか？」

指導役の士官が丁寧かつ、
威圧感を醸し出す口調で言う。

「あっ！はい、すみません！」

雪人は少女の存在を頭の隅に
追いやって、研修に集中した――

一日目の研修を終え、下士官用の
共用部屋のベッドに倒れ込む雪人。

研修の疲れもあり、そのまま深淵へと
沈み込んで行った――

――どの位眠ったのだろうか？

雪人の意識が浮上した時は時計の針は
夕食の時間を指し示していた。

「————あっ！」

慌てて部屋を飛び出したが、
食堂への行き方が分からない。

「————おいで」

その声は雪人に向けられた声だった。

「……………え？」

「————ご飯、食べたいんですよ」

声のする方向に導かれた雪人は
そのまま食堂へと辿り着いた。

「……………?」

一方、大和では――――

「あら、翡翠君」

珍しく翡翠が甲板に姿を現している。

「最近見かけなかったけど、
どうしたの？」

大和の言葉に翡翠は
いきなり唇を歪めた。

「フ、フ、フ、フ……………」

突然の変わりように言葉を失う。

「ひ……翡翠君………?」

翡翠が嘲笑を浮かべ、大和に銃を向ける。

「天宮 翔斗……それが僕の本名だ」

大和の甲板に銃声が響いた――――

その頃、『アトランティス』の生活に
慣れてきた雪人は初日の研修以来

姿が見えない少女の姿を捜し求めて
艦内を駆け回っていた。

「敵艦を補足！緊急潜行、魚雷戦準備！」

そのアナウンスが終わらない内に、
機関室へと向けて走り出す雪人。

『アトランティス』のブリッジは
緊迫した空気に包まれていた。

「魚雷発射管1番、2番の
アクティブ魚雷発射準備完了！」

艦長の高波 総三郎大佐が静かに尋ねる。

「敵は？」

その質問に高波の副官を務める
アンダーソン少佐が静かに応える。

「機関の稼働音から判断して
国連軍のアリゾナ級攻撃原潜です」

「……………一隻か？」

アンダーソンが頷く。

「私の推測ですが、吸音タイルを
装備している可能性があります」

高波は暫く考えた後、息を吸い込んだ。

「3番、4番発射管に装填してある
パッシブ魚雷は準備出来ているか？」

「……………出来ていますが？」

高波の指示の意味が理解出来ない
アンダーソン少佐。

「あちらがソナーを使用した時に
パッシブ魚雷を使用する！」

魚雷発射管3番、4番開放！」

魚雷発射管のハッチが静かに開く
音と共に『アトランティス』の
『牙』が剥き出しになる。

「ソナー音です！方位1－8－6、
距離は……2537です！」

「3番、4番魚雷……発射……！」

暫くして、鋼の皮膚が引きちぎられる
不愉快な破壊音と爆発音が

『アトランティス』を叩いた。

「……………妙だな……………」

……潜水艦にしては爆発音が小さい」

高波の、その疑問はアンダーソン少佐の

『私の推測ですが、吸音タイルを
使用している可能性があります』

に辿り着く。

「……………そもそも吸音タイルを
使用している敵を何故探知出来たんだ？」

その時、高波の思考内に
散らばったピースが一気に集まり
正しい形を形成した。

「まずい！これは敵の罠だ！！」

「……………どういう事です？大佐」

答えに辿り着きながらも、それを口にする恐怖から質問に逃れるアンダーソン少佐。

「さっき沈めたのは四魚雷だ！本体はまだ生きている！」

「……………では……………最初に我々が探知した機関音は……………」

高波が大きく頷く。

「魚雷発射管からわざと漏らしたんだ」

「……………つまり、我々を混乱させる作戦であった……………と？」

高波の深刻な表情がそれを肯定した。

国連・極東方面軍第6艦隊所属
アリゾナ級攻撃型原子力潜水艦
5番艦『テキサス』艦橋——

艦長のビル・グレイ准将は久々に
魚雷戦のスリルを楽しんでいた。

「これだから、潜水艦の
艦長を止められんのだ!!」

空も大地も支配したモビルスーツが
唯一侵入出来ないエリア——

——その海の中に潜むスナイパー、
潜水艦は未だに脅威である。

グレイ准将は以前、最新鋭の潜水空母
エンペラーシャーク級1番艦の艦長に

推薦されていたが、彼は辞退した。

彼には純粋な潜水艦こそがオアシスで
安らぎの場でもあったからだ。

「『アトランティス』、貴様を
海の藻屑に変えてくれるわ!!」

「落ち着け、ビル」

『テキサス』の艦魂、テキサスが
恋人であり、戦友である男をなだめる。

透き通るような金髪。

紺碧の瞳。

それらは、グレイ准将の火照った
スキンヘッドを冷ますには充分だった。

「……………ああ、分かっている」

自らに冷静になるように言い聞かせ、
深く息を吸うグレイ准将。

「『アトランティス』よりソナー音！」

ソナーマンからの報告を受け、
『アトランティス』を
追尾するように命じる。

「……………動きがおかしい」

今まで沈黙を守ろうとする潜水艦は
嫌と言うほど見てきたのだが、

ここまで敵に我が身を晒そうとする敵は
初めてであり、グレイ准将は

敵の巨鯨から不吉なモノを感じ取った。

「……………」だが……………」

彼もまた、手の届くところにある
甘美なる勝利の美酒の誘惑に
抗う事は出来なかった。

「構わん、追跡続行だ」

こうして『アトランティス』の
追跡を続行した時点で既に

『テキサス』の運命は定められていた。

「海底洞窟を使うとは……流石です」

アンダーソン少佐が心から
高波を賞賛する。

「……………失敗すれば命はない。
付き合ってくれるか？…………エド」

高波が一瞬、同期で友人でもある
アンダーソン少佐の名を呼ぶ。

「……………ああ、やろう。サブ」

『アトランティス』は後ろの巨鯨
『テキサス』をおびき寄せながら

海底洞窟の奥でソナーを使用、
比較的薄い壁に艦首を向ける。

「……………1番から8番、魚雷装填！」

暫くして装填完了の連絡が届く。

「1番から4番を発射!」

艦首から放たれた4本の牙が
洞窟の壁を噛み砕く音が響き渡る。

「機関最大出力! アップトリム45度!!
メインタンク・ブロー!!!!」

『アトランティス』が
暗く、狭い世界から解き放たれるのを
感じ取った高波は、次の指示を出した。

「5番から8番を発射だ!!」

艦尾から放たれた死の使者は
海底を叩き、洞窟の内部を
崩壊させていく。

崩れ落ちる岩に引き裂かれ、

押し潰されたモノ達の中には

『テキサス』の姿もあった。

海面に浮上、応急修理を終えた
『アトランティス』の内部で

雪人は、血の色をした足跡を見つけた。

足跡を追跡、辿り着いたドアのノブが
赤黒く染まっているのを確かめる。

「……………失礼します」

ドアを開けると、ベッドの上で
うめき声を上げる少女が居た。

少女の腹を見ると、
血だけではなく腸も出ている。

「キミ！大丈夫か！？」

部屋に常備されている緊急医療キットを取り出し、少女の腹にモルヒネを打つ。

その後、傷口を消毒して腸を戻し縫合に入る。

軽い痛みで目を覚ますと、ベッドの横から視線を感じた。

「大丈夫か、君」

自分を見つめるととても優しい目。

「……………アナタは、神谷 雪人君ね」

「そういう君はアトランティス？」

その問いに静かに頷く。

「……………驚かないの？」

「うん、僕は艦魂が見えるから」

アトランティスは、目の前の少年に湧き起こる興味を抑えられなかった。

銃から放たれた記憶の欠片が本来の持ち主に還っていく。

大和は、一部戻された自らの記憶を前にパニック状態に陥っていた。

「ハア…………ハア…………ハア…………」

頭の中に浮かんだビジョンが
そのまま焼き付いている。

「――私は『魂を司る存在』」

――第19話に続く

No. 19 未来編第4話『激闘!! 獄炎の南太平洋』

『アトランティス』が死傷者を出さずに

『テキサス』を海の藻屑に変えたとの
知らせは、大和を安堵させた。

「雪人……………良かった……………」

そんな大和の横から、突然声がする。

「大和さん、今し方口にされたのは…………
もしや、想い人の名前ですか？」

「……………!!!!!!!!?」

思わず声のした方を向くと、

『百合洲』級ミサイル巡洋艦
1番艦『百合洲』の艦魂、ユリが

大和を見つめていた。

「ユリさん……………」

「周りには誰も居ませんよ」

ユリの黒い瞳が、再び大和に問う。

「……………」

大和の紅潮した頬が、答を出していた。

「羨ましいです」

少し寂しそうな笑顔を空に向けるユリ。

「……………ユリさん、貴方は好きな方とかはいらっしゃらないの？」

大和の質問は賢明とは言えなかった。

「……………居ます……………」

いえ、居たと言った方がいいですね」

遠くを見つめるユリの口から語られる、恋人との思い出。

「“死の契約”も結びました」

大和が“死の契約”の存在を知ったのは、その時であった。

「艦魂と人間が愛し合う事で成り立つ、禁断の契約です」

「……………」

ここで一息つくユリ。

「互いに想い合う所までは
契約は成立しませんから大丈夫です」

「……………想い人に自らの身体を
許すことで初めて契約が交わされます」

ユリの記憶はあの夜へ——

『死の契約を結びたい? ……………
本気で言っているの、ケビン』

眼前の青年を見つめるユリ。

『本気だ。君と一緒に死にたいんだ』

『私の身体が欲しいだけじゃないの』

東洋人特有の美しい
黒真珠が青年を睨む。

『正直言うと、欲しい気持ちは
少しあるさ………だが、それ以上に』

今度は西洋人特有のサファイアが
ユリの黒真珠を見据える。

『もう大切な人を失いながら
生きたくはない………』

偽りなき輝きを放つサファイアに
何も言えなくなったユリ。

『許してくれるか……？』

ユリは深く頷いた。

青年の手がユリから少しずつ
衣服を外していく――

――時は現在――

「それから数ヶ月後、
ケ빈は戦死した………」

ユリの口から続きが語られようとした
瞬間、それを阻む声がスピーカーから
室内に響き渡った。

「当基地より南20キロ先で友軍艦隊が
モビルスーツ部隊の襲撃を受けました！」

「何ですって！？………あそこには！」

いきなり駆け出したユリにつられて
大和も駆け出した――

『百合洲』級ミサイル巡洋艦2番艦

『榛名』の艦魂、ハルは大空に

2丁拳銃を構え、ジnkスを
確実に撃ち落としていく。

「ダン！ダン！ダン！」

ハルの放った銃弾がジnkスの
コクピットを穿ち、パイロットの
生命を確実に絶っていく。

「おのれら蚊トンボ共がどれだけ束に
なってかかって来ようとムダだ！！」

しかし、隣を航行していた

『陽炎』級イージス駆逐艦2番艦

『不知火』シラヌイが艦橋部分に

粒子ビームの直撃を受けた。

「あああああああつ！！」

血が噴き出す顔を押さえながら
その場にへたり込むシラヌイ。

「シラヌイイイイイ!!」

続いて7番艦の『初風』が機関部分を
潰され、航行不能状態に陥る。

「ぎゃあああああつ!!あつ!!あつ……
脚が……つ、脚が……無いよお……」

脚を失った少女、ハツ。

「は……初風……脚を……潰されたの?」

左手で顔を押さえながら、
ハツの元に近づくシラヌイ。

「お姉ちゃん……痛いよお……
……それに、怖いよお……」

そう言って、泣き出した初風。

「……………大丈夫、お姉ちゃんが
そばに居るから……………だから、安心して」

シラヌイがハツを抱き締めた瞬間、
『不知火』がジンクス部隊の

集中攻撃を喰らい、爆発炎上する。

「がはあああああああつ!!」

全身から鮮血を噴き出した
シラヌイは二度と動かなくなった。

「お……………お姉ちゃん……………!!?」

姉が自慢していた燃えるような赤毛が
赤黒く汚れ、甲板にぶちまけられている。

「嫌だよお…………お姉ちゃん……………」

その時1機のジンクスが初風に接近、
ビームライフルを構えた。

「……………ッ!!」

ハツが凄まじい怒りの形相で
敵機を睨み付けた瞬間、数ヶ所に
ビームを撃ち込まれる。

「お姉ちゃああああああん!!!!」

それが、ハツの最期だった。

——『榛名』艦橋部分——

「『不知火』、『初風』消失!!」

『強撃』が包围されました！」

「敵モビルスーツ、残り5機！！」

「『スペリオル』、消失！！」

オペレーター達が慌ただしく戦況をリアルタイムで報告する。

「このまま、確実に数を減らせ」

艦長がそう命じた瞬間、いきなり艦橋の窓にジンクスの姿が現れた。

そのままビームライフルの銃口を向けてくる。

「ああっ……………！！？」

「嫌ああああっ……………！！！」

「うっ……………」

「くっ……………」

皆が凍り付いた次の瞬間、

横から飛び込んできた砲弾が
ジンクスの腹部を斬り裂いた。

上半身と分かれて落ちていく
下半身のコクピット部分に
更に砲弾が撃ち込まれる。

「……………助かった……………」

「艦長！新たに友軍艦艇が2隻出現！
『百合洲』と『大和』です！！」

『大和』の艦長代理を勤める
蘇我大佐が命令を出す。

「友軍艦艇の援護を行いつつ、
敵モビルスーツ部隊を叩き落とせ!!」

『大和』の対空砲が青空を睨む。

それと同時に大和も2丁の拳銃を
敵機に向けて、構えた。

「何だ……あの大型艦は？」

国連・南太平洋方面軍第2艦隊所属の
モビルスーツパイロット、

ヘンリー・クリントン少尉は
モニターに映る『大和』を見て

そう呟いた。

次の瞬間、機関銃弾を浴びた乗機もろとも四散して果てる。

「ヘンリー！！」

同じく南太平洋方面軍所属のモビルスーツパイロット、リチャード・エリソンが復仇の念に燃えながら機体を『大和』に向ける。

「敵機4、こちらに接近中！！」

オペレーターが報告した次の瞬間大和の2丁拳銃が、火を吹いた。

『大和』の艦体が揺れると同時に46センチ砲が轟き、敵機へと飛びかかる――――

大和の黒真珠は、46センチ砲弾が
敵機の胸に取り付けられた

擬似太陽炉を直撃、爆発する様子を
スローモーションで捉えていた。

「……………！」

46センチ砲の獄炎から逃れたであろう
2機のジンクスが武器を構え直しながら
こちらへと向かってくるのを確認した
大和が再び拳銃を構える。

「まだまだっ！」

対空砲の砲撃で、残り2機も墜ちた。

その頃、『アトランティス』は

先程の戦闘で傷付いた身体を癒すべく

エコーズの極秘補給基地に
腰を下ろしていた。

工場で使われるロボットアームを
改造した、修理作業ロボットが

各所で火花を生み出していく。

その光景とは無縁で美しい海が
見渡せる丘に雪人は腰を下ろしていた。

僅か二十数日だったとはいえ、
潜水艦の缶詰生活から解放された

喜びが胸の奥底からこみ上げてくる。

「こんな所に居たんだ、神谷君」

雪人の後ろから足音がしたかと思うと
長い黒髪が特徴的な少女が現れた。

「やあ、アトランティス。
身体はもういいのかい？」

少女――アトランティスは嬉しそうに
頷きながら雪人の隣に座る。

「ねえ、神谷君ってモテてる？」

「――――ぐっ!？」

喉に詰まった握り飯を茶で飲み流し、
一呼吸おいた雪人は首を横に振った。

「えー? そうなの? 向こう(昭和)では
艦魂達にモテてると思ったんだけど」

暫くしてアトランティスが
新たな疑問をぶつける。

「好きな人は居るのー?」

その言葉にハッとなる雪人。

「え？もしかして居るの！」

『もっと詳しく教えて!!』と
叫び出すアトランティスの黒真珠。

「……………」

今まで、雪人の意識の隅に隠れていた
ビジョンが脳裏で鮮やかに再生される。

「……………大和……………」

———第20話に続く

N o . 2 0 未来編第5話『大和の真実』（前書き）

作者「久々の更新です」

金剛「遅い！遅すぎるぞ！」

作者「……………すみません、実は」

大和「実は？」

作者「現代大戦略DSにハマった汗」

大和「全艦、砲撃準備！！」

作者「ちょ……………ちょっと待って！」

大和「全砲斉射——！！！！！」

作者「うわああああああっ！！！」

ドゴオオオオオオン!!!!!!!!!!

作者「ぎゃあああ――――!!!!」
(一番星になる作者)

大和「よっしゃ!全弾命中!」

No. 20 未来編第5話『大和の真実』

スポーツドーム並みに広い部屋の中心で
1人の少年が無数の星を操っていた。

「……………入っていいよ」

部屋の扉が開き、漆黒の黒髪を持つ
少女が足を踏み入れてくる。

「御前、お聞きしてよろしいですか？」

御前と呼ばれた少年は右手を宙に
かざしたまま、顔だけ向けてきた。

「何故、『彼ら』と触れ合おうとせず
ただ管理し続けようとなさるのですか」

それを口にした瞬間、少年の
2つのアメジストが冷たい視線を

こちらに浴びせるのが肌で分かった。

「……………またか」

だが、少年の冷たい視線に耐える。

「……………御前が人類の為に
尽力なさっているのは存じております」

だが、その言葉が少年の視線を
和らげることはなかった。

「人類の為？……………違うね」

口調が更に強まる。

「言った筈だよ…………この世に存在する
全ての魂の為、とね……………」

いいかい？人間は非常に愚かで傲慢な生き物だ。いい加減目を覚ましたらどうだい？『魂を司る存在』として」

その時、少女の視線に怒りがこもるのが手に取るように感知出来た。

「傲慢です……人間を知らない癖に
そう言い切るあなたこそが！！」

だが、少年の氷のような表情に変化は見られなかった。

「……………なら、君は……………
もう用済みだ。必要ない」

いつの間にか少年の右手に握られていた拳銃の弾が、少女の胸を穿つ。

「翔斗……ちょっと来てくれるかい」

テレパシーで『同胞』を呼び出した
少年は、赤い水たまりの上で

永遠の眠りについた少女の顔を
のぞき込んでみた。

「……………惜しかったな」

暫くして開かれた扉をくぐって
入り込んでくる青年。

赤黒く汚れた黒髪を捉える
青年のアメジスト。

「ちょっと『教育』をさせた方が良い」

床に跪き、右手を左胸に当てる青年。

「ハッ！この天宮 翔斗……必ずや
この者を忠実な下僕に

変えてご覧に入れましょう！」

翔斗の言葉と共に、全身を特殊な
スーツに覆われた兵士が担架を担いで
部屋に入り込んで来た。

「では……直ちに再生手術を施し、
記憶の変更も行います」

少年が頷くと共に、部屋から消える担架。

「……………さて……………」

少年は再び『管理』作業に戻った。

「…………ハッ!？」

大和が目を覚ますと、見慣れた天井が
視界を覆い尽くしていた。

「……………私は……………」

どうして良いのか分からず、
両手で顔を覆うより他に方法がない
大和であった……………

ここは、国連軍の潜水空母
エンペラーシャーク級2番艦

『ティルピッツ』の艦橋。

「何だ、この損害数は!？」

『ティルピッツ』の艦長を務める
ライアス・ヨハン・ヘルアー大佐は
出撃したジンクスが全機、

シグナルロストしたとの報せを受け、

滅多に見せない激情を露わにしていた。

「大佐……増援要請を出しました。
ここは増援を待ちましょう」

彼の副官であり、士官学校の後輩である
ミハエル・フォン・エーリヒ少佐が

ヘルアー大佐を宥める。

「あ、お帰りなさい。ライアス」

茶色のセミロングが印象的な
少女が自分のデスクに座っているのを

確かめたヘルアー大佐はベッドに
腰掛けると軍帽とネクタイを外し、
大きく溜め息をついた。

「また部下を死なせてしまったよ」

腹心の部下であるエーリヒ少佐にさえ
見せたことがない苦悩の表情が浮かぶ。

「氣を落とさないで、ライアス。
それが戦争なのよ」

ライアスの隣に腰掛け、彼の肩に
優しく手をやるティルピッツ。

「……………確かにな……………」

ティルピッツの右頬に左手を当て、
グレーの瞳を見つめるライアス。

「だが、お前だけは死なせたくない」

その時、いきなりティルピッツが
愛しい男の腕に抱き付いた。

「!？」

突然の出来事に思わず目を丸くする。

「当たり前でしょ！私が居なくなったら
誰がライアスの面倒みるのよ!？」

ティルピッツの言葉に苦笑を漏らす。

「子供扱いは勘弁してくれよ」

すると、ティルピッツがいきなり
頭をクシャクシャに撫でてきた。

「充分子供でゝす♪」

「我々の時間遡行の目的は……………」
国連軍結成の阻止にありました。
現在もこれは変わりません」

タキが、そう言い出すと共に
ナルミがスクリーンの電源を入れる。

「最初に我々が居た世界では、
アメリカ中心の軍事組織……………」

つまり、国連軍が『統一』の名の下に
反国連思想団体及び反国連国家群に
対して圧倒的な軍事力で殲滅する
悲惨な世界でした……………」

スクリーンには、国連軍の持てる
テクノロジーの結晶にして

圧倒的な軍事力を象徴する機体、
ジンクスが軽装備のレジスタンスを

容赦なく殲滅していく
光景が広がっていた。

「当時はエコーズも数十人の団体に過ぎませんでした……………」

しかし、我々は考えました。

時間逆行によって歴史を変えられたら

国連軍が誕生する事も無い、と……………」

ナルミの言葉に有賀大佐達は真剣に耳を傾けていた。

「しかし、現在も国連軍は存在します。

そこでアメリカの歴史を調査した結果人種問題が大きく関与していました」

スクリーンが次の情報を映し出す。

「我々の介入により日本が勝利した事はアメリカ国民を大きく変えました。

人種差別を無くそうとする……………
言わば人間平等主義者と

逆に人種差別を推し進める

白人至上主義者に分かれたのです」

その頃、『アトランティス』は
3ヵ月にも及ぶ航海を終えるべく、

エコーズのサン・トンプソン基地を
目指して海の中を駆けていた。

「あと数日もすれば、到着するぞ」

『アトランティス』の艦長である

高波 総三郎大佐は、雪人にそう告げた。

「大佐……本当にお世話に……」

お世話になりました、と言いかけたが、
高波の手がそれを制した。

「それは下船する時に言いたまえ。

……………君のような者を
部下に持てないのは残念だよ」

3ヵ月も一緒に居たせいかな、
情が移ってしまったようである。

南太平洋の海の真ん中に浮かぶ島。

そこに『ティルピッツ』が身を寄せ、
補給を受けていた。

灼熱の陽光の中、『ティルピッツ』に
運び込まれる補給物資、
そして国連軍の象徴であるジンクス。

「……………」

グレーの瞳はヘルアー大佐に敬礼する
若いパイロット達を見つめていた。

（あの中で何人が生き残るのかしら……）

「お姉さま！ お久しぶりです！」

いきなり明るい声がしたかと思うと
すぐそこにはビキニに包まれた
眩しいボディがあつた。

この少女は、『ティルピッツ』の
増援として南太平洋に派遣された

国連・南ヨーロッパ方面軍所属の
エンペラーシャーク級潜水空母

4番艦『ヴェネツィア』の艦魂、
ヴェネツィアである。

その明るい笑顔を目にした
ティルピッツの表情が微かに陰る。

(……………南ヨーロッパ方面軍所属の
ヴェネツィアまで……………)

———第21話に続く

N o. 20 未来編第5話『大和の真実』 (後書き)

作者「ううううう………」

(駆逐艦の艦魂に湿布貼って貰う作者)

武蔵「砲撃を受けて湿布程度って…」

金剛「作者が居なくなったら困るだろ？
作品保護プログラムって奴さ」

エコーズ側キャラクター情報整理（前書き）

作者

「どうもお久しぶりです」

武蔵

「おっそーい！何なのこの遅さは！？」

大和

「まあまあ……落ち着いて」

作者

「外伝中止の件、本当にごめんなさい」

雪人

「原因不明の鬱状態になったなんてビックリしましたよー」

金剛

「思春期の男子ならば誰でもあるが、だからといって安易に作品を消すのは

少々いただけないものだな」

赤城

「その様子だといぶマシになったようにけど……………」

作者

「はい。クライマックスの展開も決まりましたし、もう大丈夫です」

雪人

「ところで僕は何時になったら大和に逢えるんですか!？」

大和

「今、会っているじゃないの」

作者

「本編での再会か……………そうだな、あと1話くらい待ってよ」

エコーズ側キャラクター情報整理

・『エコーズ』側キャラクター

・神谷 雪人
みたに ゆきと

性別…♂

年齢…18

・現時点での主人公。

原潜『アトランティス』で

22世紀の機関整備技術

（事情があり水上艦ではなく潜水艦）を
学び、『大和』の整備班に復帰する予定。

尚、現時点での階級は兵長扱い。

（これはエコーズが国軍ではないため）

戸高 賢司
とだか けんじ

性別…♂

年齢…45

エコーズの誇る『愚連艦隊』旗艦
『百合洲』の艦長。

階級は大佐扱い。

・高波 たかなみ 総三郎 そうざんろう

性別…♂

年齢…29

・エコーズの最新鋭原子力潜水艦
『アトランティス』の艦長。

階級は大佐扱いとなっている。

嘗ては米国海軍の軍人だったが
国連軍の傀儡と化した米国に失望、
国を捨ててエコーズに参加した。

・エドワード・アンダーソン

性別…♂

年齢…29

・高波の副官を勤める優秀な軍人で
階級は少佐扱い。

高波とは公私を共にしてきた旧友。

・ケネス・ジョージ・マキハラ

性別…♂

年齢…41

・エコーズの総司令官。

階級は准将扱いとなっている。

・タキ・ハワード・オオシマ

性別…♂

年齢…26

・エコーズの技術者で
階級は少佐扱い。

『大和』に近代化改修を施し、
過去へと帰還する計画を進めている。

・ナルミ・アレックス・アリス

性別…♂

年齢…24

・タキと同じくエコーズの
技術者で階級は少佐扱い。

『大和』に改修を施し、彼女に
本当の未来を託す。

・大和

性別…♀

外見年齢…16

・『大和』に宿る魂。

天宮 翔斗によって戻された
記憶の一部により、通常の艦魂とは
異なる存在であることが判明。

・ユリ

性別…♀

外見年齢…20

・エコーズ最強の艦隊『愚連艦隊』の
旗艦『百合洲』の艦魂。

徐々に軍備を強める国連軍に苦戦する。

・ハル

性別…♀

外見年齢…17

・『百合洲』の同型艦『榛名』の艦魂。
国連軍のモビルスーツを見下し、
『蚊トンボ』と蔑む。

(それでも良いヤツ)

・アトランティス

性別…♀

外見年齢…15

エコーズの最新鋭原子力潜水艦
『アトランティス』の艦魂。

ませた性格で他人の恋愛に

すぐ興味を示す。

・シラヌイ

性別…♀

外見年齢…18

『陽炎』級イージス艦2番艦

『不知火』の艦魂。

国連軍モビルスーツ部隊の攻撃で戦死。

・ハツ

性別…♀

外見年齢…10

シラヌイの妹で『陽炎』級の7番艦
『初風』の艦魂。

国連軍モビルスーツ部隊の攻撃で戦死。

エコーズ側キャラクター情報整理（後書き）

次回は国連軍のキャラクター整理です。

乞うご期待!!

（期待する程のものでもないへへ；）

作者

「これからも、私は艦魂を愛し
小説を書き続ける事を誓います!!」

金剛

「その意気だ!!」

国連軍側キャラクター情報整理（前書き）

作者

「こんばんは。憂鬱な天使です」

翔斗

「おいおい、自分の名前すらマトモに覚えていないのかよ!？」

作者

「えーと……あなたは確か………」

翔斗

「天宮 翔斗だっ!マジでヤバイぞ……」

作者

「実はとある方にキツく言われまして」

翔斗

「どんな事を言われたんだ?」

作者

「『お前はちやほやされたくて、

小説を書いているんだろ?』って……」

翔斗

「ソイツはキツいな……………」

作者

「そんなつもりはないのに……………」

翔斗

「だったら、言い返せよ!」

作者

「相手にしてもムダな奴だからな」

翔斗

「じゃあ、何で前書きに書くんだよ?」

作者

「腹は立ったけど、結果的に
自分が小説を書く意義について

再確認出来たから……………一応は
感謝しなきゃ、と思ってな」

国連軍側キャラクター情報整理

・マリア・ジェーン・ワトソン

性別…♀

年齢…39

国連の総長にして国連軍の最高司令官。

圧倒的な軍事力を背景に、速やかな
世界統一を目指しており

どのような罪も背負う覚悟を持つ。

・ライアス・ヨハン・ヘルアー

性別…♂

年齢…34

国連・欧州方面軍所属の
海軍軍人で階級は大佐。

『エンペラーシャーク』級潜水空母の
2番艦『ティルピッツ』の艦長。

・ビル・グレイ

性別…♂

年齢…42

国連・極東方面軍第6艦隊所属で
階級は准将。

『アリゾナ』級攻撃型原子力潜水艦の
5番艦『テキサス』の艦長でもあり、

根っからの潜水艦乗り。

高波の指揮する『アトランティス』を
撃沈すべく奮闘するが、高波の戦術に
引っ掛かり、海の藻屑と化した。

・ハワード・メイソン

性別…♂

年齢…31

国連・南太平洋方面軍所属の

モビルスーツパイロットで階級は大尉。

定期パトロールの最中に現れた

『大和』を撃沈しようとするが、

エコーズの妨害に遭い、部下を2人失う。

・リナルド・ケーニッツ

性別…♂

年齢…22

国連・南太平洋方面軍所属の

モビルスーツパイロットで階級は少尉。

普段は軽い性格であり、上層部をよく悩ませる。

それでも、国連への忠誠は強く
『大和』撃沈命令が下った時は

『兵士の顔』をしていた。

しかし、エコーズの妨害により
機体と運命を共にした。

・ヘンリー・クリントン

性別…♂

年齢…19

国連・南太平洋方面軍所属の
モビルスーツパイロットで階級は少尉。

『テイルピッツ』に臨時配属され、
海上訓練中の『榛名』を襲撃するが

救援に駆け付けた『大和』の攻撃で戦死。

・リチャード・エリソン

性別…♂

年齢…23

国連・南太平洋方面軍所属の
モビルスーツパイロットで階級は少尉。

ヘンリー同様に『ティルピッツ』に
臨時配属されたパイロットで

『榛名』を襲撃するも、『大和』に
撃墜され、戦死。

・テキサス

性別…♀

外見年齢…19

国連・極東方面軍所属の潜水艦

アリゾナ級5番艦『テキサス』の艦魂。

艦長のビル・グレイ准将とは
恋仲であつたが、不幸にして

ビルの判断ミスにより命を落とす。

・テイルピッツ

性別…♀

外見年齢…17

国連・欧州方面軍所属の潜水空母
エンペラーシャーク級2番艦
『テイルピッツ』の艦魂。

艦長のヘルアー大佐とは恋仲である。

・ウリヤーク

性別…♀

外見年齢：16

国連・ロシア方面軍所属の潜水艦

エンペラーシャーク級3番艦

『ウリヤーグ』の艦魂。

妹のヴェネツィアを可愛がっている。

・ヴェネツィア

性別：♀

外見年齢：16

国連・南ヨーロッパ方面軍所属の潜水艦

エンペラーシャーク級4番艦

『ヴェネツィア』の艦魂。

姉を一途に慕う可愛い妹キャラ。

国連軍側キャラクター情報整理（後書き）

翔斗

「次は昭和編キャラクターだ!!」

作者

「全員艦魂なので、昭和編の艦魂の情報整理したい方は乞うご期待!!」

翔斗

「期待持たせるなよ……………」

昭和編キャラクター情報整理（前書き）

作者

「次回は本作の重要な存在、
『魂を司る存在』についての解S…」

大和

「もうすぐ《未来編》も終わります！
昭和の世界で大暴れする私達に……」

武蔵

「乞うご期待〜！！」

昭和編キャラクター情報整理

・赤城：

性別：♀

外見年齢：19歳

大日本帝国海軍が誇る空母機動部隊の旗艦である『赤城』に宿る魂。

旗艦を務めるだけのことはあり
統率力に優れている。

戦艦を『時代遅れ』見下したりと
問題点がないわけではない。

・服装は帝国海軍将校のものと
全く同じものを着用しており、
普段着もこれと同じ服を使っている。

・髪型は漆黒のポニーテール。

・体格は大人の女性に近い。

・余談だが、空母の艦魂は全員飛行服を持っている。

・加賀：

性別：♀

外見年齢：18歳

空母『加賀』に宿る魂。

空母機動部隊の中でも大の酒好き。

普段は単なる飲んだくれだが

酔いが醒めると、性格が豹変。

戦闘を事務的感觉で捉え、

淡々と任務を消化する殺戮兵器と化す。

・普段の服装は帝国海軍将校の制服を着崩しているが、酔いが醒めるときちんと着こなす。

- ・髪型は左サイドテール。

- ・体格はスレンダー系

- ・加賀の現在の性格は過去に起きた『事件』の影響であるらしい。

- ・翔鶴：

性別：♀

外見年齢：13歳

空母『翔鶴』に宿る魂。

笑顔をモットーとする明るい少女。

- ・服装は公私共に軍服。
(但し、時々ミニスカにする)

- ・髪型はロングヘア。

- ・体格は当然スレンダー系。

・翔鶴は笑顔至上主義者であり
余程のことが無い限り笑顔を崩さず、
その徹底ぶりは寝顔まで微笑む程である。

・瑞鶴：

性別：♀

外見年齢：11歳

空母『瑞鶴』に宿る魂。

姉に似て笑顔至上主義者。

・服装は軍服で、私服は和服。

・髪型はショートボブ。

・姉並みの笑顔至上主義者だが、
姉と異なり何か秘密があるようだ。

・飛龍：

性別：♀

外見年齢：17歳

空母『飛龍』に宿る魂。

思ったことをストレートに言う性格で
かなりの男前な為、艦魂達にモテる。

・服装は軍服だが、着崩している。

私服はボーイッシュな服を好んで着る。

・肩まである髪を後ろで留めている。
(ポニーテールではありません)

・スポーツが大好きなわんぱく少女。

ちなみに筋金入りの犬派である。

・男を絶対服従させるテクに優れ、
艦魂史上最強のDSである。

・蒼龍：

性別：♀

外見年齢：17

空母『蒼龍』に宿る魂。

飛龍の姉にあたるが、何故か容姿は妹と瓜二つである。

（艦魂でも非常に稀なケース）

だが、性格の面では言いたい事をストレートに伝えないなど様々な相違点が見受けられる。

・服装は軍服だが、妹同様着崩している。

私服は可愛い服を好んで着る。

・髪型はショートボブ。

・バレエに興味があり、その影響で身体がとても柔らかい。

妹とは対照的に筋金入りの猫派である。

・自分を引っ張ってくれる
頼もしい男性が好みのタイプであり
ややMが入っている。

（わざわざ書く必要はないが、
犬派の男性のみに対してはSとなる）

・金剛

性別：♀

外見年齢：20

『イギリス生まれのサムライ』という
あだ名を持つ艦魂の古参者。

赤城の戦艦に対する偏見には
頭を悩ませていたが、

最期は彼女と和解できた。

・比叡

性別：♀

外見年齢：20

金剛の妹だが、『比叡』以降の
同型艦は日本製のため、外見は
日本人の姿をしている。

本編では描かれなかったが、
甘えん坊なキャラクターで

3人の妹の中では一番姉を慕っていた。

だが、しっかり者でもあり

金剛の死を受けて自分が妹達の

手本となるべく、勇ましくあろうと
無理をしてしまうが最終的には

妹達に励まされ、いつものキャラに
戻る。（本編では描かれず）

空母に対する偏見は無く、
本編の第2話では赤城達に対して
『一緒に飲みましょう』と誘っている。

・榛名

性別…♀

外見年齢…19

金剛型戦艦の三女であり、
姉妹の中では一番軍人に近い。

何かを言うにしても最後に必ず
『〜であります』と付けているのが
良い例と言えよう。

・霧島

性別…♀

年齢…17

金剛型姉妹の末っ子で、
ややユル目な発言をする。

次女の比叡同様、空母に対する
偏見は全く持ち合わせていない。

・長門

性別…♀

外見年齢…16

『大和』が誕生するまでの間、
世界一の戦艦の座を守り続けた

『長門』の艦魂。

大和と関わる時間は少なかったが、
彼女の中に『特別モノ』を見出している。

・陸奥

性別…♀

外見年齢…15

長門の妹で『長門』型戦艦2番艦
『陸奥』の艦魂。

本編未登場。

（本体の『陸奥』は対『キエフ』戦で登場している）

・その他駆逐艦

性別…♀

外見年齢…11～17

大日本帝国海軍の駆逐艦。

本作のマスコットキャラクター的存在。

昭和編キャラクター情報整理（後書き）

※ネタバレ可能性あり。
見たくない人は見ないでね

大和

「これが最終回の台本……………」

武蔵

「ちょ……………ヤバくない？」

作者

「戦争とはヒーローごっこじゃないからな。残酷なものだよ」

金剛

「うむ。確かにな」

『魂を司る存在』キャラクター情報整理

・魂を司る存在

有史以前から、この世界を『管理』し続けてきた存在。

主に『魂』の輪廻転生を司り、世界の歴史にも大きな影響を与える。

彼らは通常、人間で言う『性別』を持たない。

・御前

性別：無し

外見年齢：16

『魂を司る存在』のリーダーで少年のような外見を持つ。

地球の歴史を影から操って
『魂のバランス』を保っている、と
自称しているが、真実は不明。

・天宮 翔斗

性別…♂

外見年齢…18

御前と瓜二つの外見を持つ青年。

艦魂・『大和』の誕生に大きく関わる。

尚、『大和』潜入時は自発的に
記憶を封じて一時的な記憶喪失を
引き起こしている。

潜入型であるが故に、人間の男性を
模倣した身体組織を持つ。

・その他にも『魂を司る存在』は

多数存在しているらしい。

No. 21 未来編第6話『新たな脅威』

『アトランティス』は、エコーズの
サン・トンプソン基地まで
後僅かという距離まで達していた。

「ソナー、異常なし」

ソナーマンが状況を報告する。が……

「……………妙だな」

高波の勘は、それを由としなかった。

「……………大佐、考えすぎでは？」

高波の副官を務めるアンダーソン少佐が
それを否定しようとする。

「……………だど、良いが」

南太平洋の作戦に派遣された
エンペラーシャーク級潜水空母2番艦
『ティルピッツ』の増援として

南ヨーロッパ方面軍から急遽派遣された
同級4番艦『ヴェネツィア』の艦魂、

ヴェネツィアは、緊張に包まれていた。

何故なら、今度の標的はエコーズが
誇る最新鋭原子力潜水艦、
『アトランティス』。

かのビル・グレイ准将の指揮する
『テキサス』を海の藻屑に変えた

恐るべき敵なのだ。

「よし、頑張るぞ!!」

そう叫んでみたものの、
緊張——その奥に潜む闇を
照らすには至らなかった。

「無理しちゃ駄目よ、ヴェネツィア」

優しい声がした方向に振り向くと、
一番年が近い姉、ウリヤークが
いつも自慢にしている黄金色の
ロングヘアーを潮風に靡かせていた。

「あ…………お姉さま」

ウリヤークの手が、ヴェネツィアの
銀色に輝くショートヘアを優しく撫でる。

そして、ニヤリと笑ったかと思うと、
ヴェネツィアの秘密に手を探り入れた。

「早いところ任務を終わらせないと
彼がストレスで満タンになるわよ」

「なっ……………」

愛らしい顔をトマトにするヴェネツィア。

「補給基地で着ていた水着を見て
直ぐに分かったよ。あのビキニ……………
恋人の為に着ていたんでしょ？」

顎に手を当て、余裕の表情を
崩さないウリヤーク。

「……………南太平洋方面軍にはセクシーな
女の子が一杯居ますから……………」

ムスツとした表情に紅が差して

ますます愛らしくなったヴェネツィアを

いきなりウリヤーグの両腕が包み込んだ。

「可愛い〜〜〜♪」

いきなり抱き締められたヴェネツィアは
『あひゃ』と、声を出しながら

笑顔へと戻った。

「お姉さま、この作戦が終わったら
また一緒に海で泳ぎましょう！」

その笑顔に先程の緊張は見られなかった。

「それは名案ね！休暇が楽しみだわ」

『ヴェネツィア』の艦内に設けられた
水中用モビルスーツの格納庫では

国連軍の最新鋭機アクア・ジンクスが
出撃の時を待っていた。

それらを見渡せるキャットウォークで
ナポリタン風味の戦闘食をかじる青年。

「アルピオ！もう直ぐ作戦が始まるわ」

青年——アルピオ・アルマティに
話し掛けるヴェネツィア。

「……………了解した」

そのままアクア・ジンクスの
コクピットに向かおうとした瞬間、
後ろから柔らかい感触に襲われた。

「私の水着姿、どうだった？」

アルピオに抱きつきながら
イタズラっぽい声で
訪ねるヴェネツィア。

その一言で寡黙な表情に熱が走る。

「……………」

紅をさした顔が無言で、
本音を正直に表現していた。

「今度の休暇、また着るからね☆」

眩しい笑顔がヴェネツィアの
アルピオに対する思いを伝える。

そして、アルピオの顔が真顔に戻る。

「……………了解した」

青年がコクピットに消え、
ハッチが閉ざされると共に

密閉された格納庫内部に多量の海水が
注ぎ込まれ、モビルスーツ発進用の
ハッチが開放された。

そして、出撃準備完了の報が
伝えられた艦橋で、

艦長が出撃命令を下し、それは
オペレーターを介して格納庫で
命令を待つ機体へと伝えられる。

「了解……第81独立海戦機動群、
作戦行動を開始する！！」

『ヴェネツィア』の腹から吐き出される
10機のアクア・ジンクス。

『アトランティス』を出迎えるべく
沖合まで来ていたエコーズの主力艦、
『陽炎』級イージス駆逐艦の
3番艦『黒潮』と4番艦『親潮』、
8番艦『雪風』の3隻は

海中に『不穏なモノ』を感じ取っていた。

そして、それは『彼女達』も
同じだった――

「……………臭うな」

『黒潮』の甲板から蒼い海を睥む
黒いポニーテールの少女、

姉の視線を追う茶髪のサイドテール、

そして何かに怯えたような目で
海を見つめる銀髪のロングヘア―。

彼女達は陽炎級の艦魂、

『黒潮』のクロ、『親潮』の親潮、
『雪風』のユキだ。

「ええ……『ヤツら』の臭いが
プンプンしています……………」

ユキがクロに同意の表情を見せる。

その『違和感』は『黒潮』の
ブリッジで徐々に明らかになった。

「ソナーに感！これは……………！！」

ソナーマンが言葉を失う。

「どうした！！状況を報告しろ！」

艦長が放った一言で正常な感覚を
取り戻したソナーマンが衝撃的な情報を
言葉にして紡ぎ出す。

「熱源の大きさ、駆動音から
モビルスーツと推定されます！」

アクア・ジnkスの1機が魚雷を
装填した対艦ライフルを獲物である

『陽炎』級イージス艦の1隻に向けた。

「アリーヴェ・デルチ！（サヨナラだ）」

アルピオの放った言葉と共に
死神が解き放たれ、獲物目掛けて

大きく鎌を振り上げる――――

直後。獲物は艦体中央から真つ二つに
両断され、その骸を海底へと沈めた。

出迎えの艦が国連軍の襲撃を
受けているとの知らせは、

『アトランティス』にも届いていた。

「どうしましょう、大佐」

アンダーソン少佐が艦長の

高波大佐に指示を仰ごうとする。

だが、高波は考え込んだまま動かない。

「このまま、海底で友軍が沈められる
様子を、指をくわえて見ていると？」

腹心の部下であり、友でもある
アンダーソン少佐の言うことは

確かに倫理面では正しいと言えよう。

だが、戦術面においては

その考えが正しいとは限らないのだ。

だが、軍人と言えども人間。

「……友軍艦艇の援護に向かう！」

その選択が、悲劇を招く——

——第22話へ続く

No. 22 未来編最終話『出航の時』(前書き)

作者

「遂に未来編も完結……」

武蔵

「ちよつと!! 短いわよ!!」

作者

「あ、それは……その……
決してナマケという訳では……」

その46センチ砲、下ろして下さい……」

武蔵

「問答無用!! 一番星にしてやるわ!!」

ズドオオオオン!!

No. 22 未来編最終話『出航の時』

アクア・ジンクス部隊は、
浮上する潜水艦を視認した。

その潜水艦こそ……彼らが目当てに
していた獲物、『アトランティス』。

「馬鹿な連中だ。こっちには
水中用のカメラがあんだよ!!」

魚雷ライフルの照準が

『アトランティス』の横腹に
定められ、魚雷が発射された――

「ぐがあああっ!!」

突然、機関室に響いた叫び声は
メカニック達の鼓膜を震わせるには
十分な音量だった。

……にも関わらず、彼らは
何の反応も示さない。

——ただ一人を除いて。

「……………アトランティス!？」

1人の少年が通路の奥へと
走り出し、声の主を見つける。

それは、1人の少女だった。

「……………神谷……………くん……………」

少女のぷりつとした可愛らしい唇は
口から吐き出される鮮血で

目を伏せたくなる程赤黒く汚れている。

「アトランティス！しっかり！」

少年——神谷 雪人は、

負傷した少女——アトランティスの
身体に布を巻き付けようとした。

「神谷君……もう、ダメよ……
もう、私は……沈むわ……」

諦めるな、と反論しようとした雪人は

アトランティスの澄んだ瞳で
無言の制止を受けた。

「彼らの目的は……私を沈める事……

だから、アナタは……海上に居る
友軍艦艇に救助して貰って」

もう反論する事も出来ず、

ただ頷く事しか出来ない雪人。

「……………神谷君……………ありがとう」

幸せそうに微笑むアトランティス。

「男の子とお喋りしたり、
一緒にご飯食べたり……」

一生叶わないと思っていた願いを
神谷君は叶えてくれた。全部」

その目から、涙が溢れ出す。

「……………幸せだったよ」

アトランティスが右手を雪人へかざす。

「……………生きて……………」

雪人の視界が白熱する。

——その直後——

『アトランティス』は駄目押しの
魚雷攻撃により、真っ二つに引き裂かれ
海の底へと沈んでいった——

——数日後。

エコーズは予定を大幅に繰り上げ、

6日後の夜明けに『大和』を
再び時の彼方へと送り出す事にした。

その為、急ピッチで物資補給が行われ
人々が忙しく行き交うようになった。

――
出航まであと3日になった『大和』。

大体の出航準備を終えた『大和』の乗組員達は、地上の基地で穏やかな時を過ごしていた。

気の合う者同士で集まり、談笑する――

その光景の中に、雪人の姿は無かった。

ここは宿舎。その中の部屋で雪人は1人、泣いていた。

「――雪人」

優しく呼び掛ける大和。

「僕は……っ……誰も………」

相変わらず自らの無力さを嘆く雪人。

「雪人っ!!」

突如、雪人の左頬に平手打ちが
クリーンヒットする。

「人間が無力なのは当然よ!!
1人じゃ何も出来なくて当たり前!!」

言葉を失う雪人。

「それに……泣いてばかりじゃ
未来には進めないわよ!!」

そう言い放ち、本体へと戻る大和。

――出航前夜。

有賀大佐以下、『大和』の
重要人物を除く乗員は全員、

『大和』へと搭乗していた。

時空の船旅へと繰り出す時は近い――

『大和』の甲板で星空を眺める
タキとナルミ。2人は、この戦いに

決着を付けるべく、再び『大和』に
搭乗する事を許されていた。

「これが最後のチャンスだな、ナルミ」

遠くを見つめる目で呟くタキ。

「ああ……………そうだな。タキ」

煙草に火を付けるナルミ。

「今度こそ、終わらせる」

嵐の前の静けさを表すかのように
穏やかに、そして美しく輝く星達。

東の水平線から眩い光を纏い、
夜明けを告げる太陽。

旅立ちに相応しい朝の光を浴びる
『大和』の姿はとても勇ましく、

そして美しかった。

その甲板で太陽を見つめる大和と雪人。

「——大和」

大和が雪人の方を見つめる。

そこには、瞳に固い決意の光を宿した青年の姿があった。

「僕は、これまでに散っていった艦魂や兵士達を忘れない」

静かに頷く大和。

「これからの戦いでも、きっと……いや、間違い無く沢山の人が死ぬ」

「その中には僕も居るかも知れない」

迷いのない瞳、しっかりした声で言葉を紡ぐ雪人。

「死ぬ時が来たら受け入れるしかない。

……だが……もしも、生きていれば。

生きていれば、僕は戦う」

「————戦争を招き寄せるモノと。

1人の人間、神谷 雪人として」

大和の顔に久しぶりに笑みが浮かんだ。

「雪人……………」

——その時だった。

遥か遠くのエコーズ基地に
無数の爆炎が見えたのは。

敵襲を告げるそれを目にした瞬間、
『軍人』の顔に戻る青年と少女。

ここは『大和』の艦橋。

そこで衝撃的な知らせがクルーの
脳天に強烈な一撃を与えていた。

「有賀大佐が戦死なされた!？」

言葉を失うタキとナルミ。

『はい。他の将校の方々と共に
マキハラ司令に別れの挨拶を
なさっている時に……………』

出航直前で『頭脳』を無くした『大和』。

「オオシマ少佐、アリス少佐。

お二方で『大和』を指揮し、過去へ
タイムスリップして下さい!!!」

相手の顔が見えなくなり、
画面の上を砂嵐が走り出す。

「ハッハッハッハッ!!!
見たか、これが……国連軍の力だ!!!」

司令官が高らかに笑う中、

20数隻以上ものイージス艦から
艦対地ミサイルが、

あられの如く放たれ、

エコーズのサン・トンプソン基地を

徐々に破壊していく。

「この基地を破壊さえすれば、
反国連勢力は唯一の砦を失う！！」

徹底的に攻撃しろ！！」

エコーズの誇る『愚連艦隊』の旗艦

『百合洲』級ミサイル巡洋艦1番艦
『百合洲』と2番艦『榛名』は

『大和』の為に、その生命を
捧げんとしていた。

「ハル！大和さんが出航するまでの間、
敵を引き付けるのです！！」

2丁拳銃で次々と敵機を落としながら

妹に念を押すユリ。

「分かっています、姉上！」

旗艦として開発された高性能の
イージス艦2隻による猛攻は

流石のジンクスでさえ、全弾
防ぎきるのは困難であった。

その証拠に、複数のジンクスが
瞬く間に火球へと変わっていく。

——しかし、彼女達だけで
ジンクスを全機撃退するのも

また困難であった。

徐々にジンクス部隊が数の利を活かして
物量とフォーメーションをフルに

駆使した反撃に始める。

「まだだ！大和さんが出航するまでは倒れるわけにはいかないんだ！！」

徐々に粒子ビームが身体を傷付ける。

「くう………っ！！」

遠ざかるユリの意識は『大和』が

眩い光を放ち、姿を消す様子をしっかりと捉えた。

「———————護りきれた———————」

時間は少し遡る。

「時空移転準備完了しました!!
いつでも行けます、少佐!!」

時空移転システム専門のオペレーターが
『出航』の準備が整った事を告げる。

「よし、直ちに出航だ!!
時空移転システム、起動!」

タキの指示で各部署のオペレーターが
それぞれの仕事につく。

「原子炉及び擬似太陽炉、異常なし」

「各部の電力供給率、安定しています」

「火器管制システム、オールグリーン」

「推進機関、問題ありません」

「各レーダー、良好状態」

海の上を駆ける大和の輪郭が
徐々に揺らぎ、眩しい光を放った。

そして、次の瞬間には姿を消していた。

———第23話へ続く

No. 22 未来編最終話『出航の時』 (後書き)

作者

「うう………体中痛い………」

武蔵

「あら、生きていたのね」

作者

「次回からは1943年のアメリカを
舞台に、『大和』の46センチ砲が

雄叫びを上げます！」

雪人

「ちなみにアメリカは、

白人至上主義者の勢力『神の雷』と
人間平等主義者の勢力『自由の剣』が
対立しており、日本は『自由の剣』と
同盟を結んでいる状態です」

作者

「こんな愚作ですが、これからも
宜しく願います！」

N o. 23 アメリカ内乱編第1話『アメリカ大陸燃えゆ』（前書き）

作者

「ついに始まりました、新章！」

赤城

「私も久しぶりに登場するぞ」

加賀

「何か、ちょっと目を離している間に
凄いことになっているわね、アメリカ」

蒼龍

「日本軍の新型機にも注目！」

No. 23 アメリカ内乱編第1話『アメリカ大陸燃えゆ』

ここは、旧アメリカ合衆国の領土、
旧テキサス州のボーモント。

『神の雷』側が予定を繰り上げて
完成・量産化にこぎつけた
主力戦車M26パーシングが

『自由の剣』側のM4シャーマン中戦車を
次々とスクラップに変えていく。

「野郎共！ 一步も譲るんじゃないぞ！」

『自由の剣』のシンボルである

『羽の生えた剣』を装甲版に
マーキングしたM4シャーマン中戦車を
指揮するケビン・ターナー少佐は

性能と数の両方で不利になりつつある

味方の状況に唇を噛みしめていた。

「クソっ……！！航空支援さえあれば！」

その時、翼を旧合衆国軍のマークで彩ったエンテ型の戦闘機が

東の空から現れた。

その翼から放たれるロケット弾によって
鉱物と繊維、そして有機物が混じった
醜悪な塊と化していくM26達。

「よし！野郎共、押し返せ！！」

この日、『自由の剣』は旧合衆国の

旧テキサス州の都市、サンアントニオと
ヒューストンの奪取に成功した———

旧合衆国の西側にしか港が無かった
『自由の剣』にとって、

この意味はとても大きいモノだ。

その夜、キャンプを設置して
しばしの間の憩いを楽しんでいた

ターナー少佐は、旧友と
思わぬ再会を果たした。

「やあ、ケビンじゃないか!!」

耐Gスーツを着た、若い男が
相変わらず明るい声で話しかけてくる。

「アッシュ! 久しぶりだな!」

古き友との再会の喜びを
噛み締めるかのようにバグする2人。

アッシュ・ウィルシャー少佐。

旧合衆国陸軍航空隊所属にして

『自由の剣』のエースパイロットだ。

「今日の戦闘で『スパーク』に乗っていたのはお前なのか？」

「ああ、あの機体は最高だぜ」

——『スパーク』。

『自由の剣』が日本海軍の主力戦闘機『震電』をライセンス生産した機体で

『自由の剣』には欠かせない戦力だ。

旧テキサス州・ヒューストンのガルヴェストン港に徐々に集まる

旧合衆国海軍の軍艦達。

その中でも一際大きい艦が
威光を放っていた。

新造空母『オンタリオ』。

『自由の剣』の艦隊旗艦であり、

もしも歴史への介入が行われなかったら
『ミッドウェー』と名付けられた筈の

大型航空母艦である。

——その甲板で月光を眺める少女。
月明かりで自慢の金髪が煌めく。

彼女は『オンタリオ』の艦魂、
オンタリオである。

特にする事が無いときは
空を眺めるのが、彼女の趣味だ。

「オンタリオ司令、お食事の準備が整いました。こちらへ」

凜とした声でオンタリオを呼んだのは彼女の副官にして、『自由の剣』の

主力艦、フレッチャー級駆逐艦の新造型第1号「ロミオ」の艦魂、

ロミオである。

「ありがとう、ロミオ」

彼女達は、明朝より『自由の剣』によるアメリカ東海岸侵攻作戦に参加し、

ペンサコーラに後退した『神の雷』側の艦隊を撃滅するのだ。

その頃、日本本国では『震電』に代わる

次期主力戦闘機『秋雨』の初飛行が

成功し、皆が歓喜に震えていた。

数多の歓声と拍手を浴びながら、大地に脚を下ろす『秋雨』。

ジェットエンジンと一体化した胴体。

シャープな印象を与える後退翼。

涙滴型のコックピット。

後に新生アメリカ合衆国空軍の主力戦闘機となるF－86セイバーの

祖先とも言える機体である。

「やりましたな！」

初老の男性が、頭の禿げた老人の肩を叩き、苦勞が報われた喜びを

これ以上無い位の笑顔で表現する。

「ええ。ですが、艦載機として運用するには、まだまだですよ」

老人が照れたような笑みを見せる。

「いえいえ、そんなに急がなくても『雷電』や『双電』で充分ですよ」

『雷電』とは、『震電』の発展型でエンテ型の特徴を受け継ぎつつも、

後退型逆ガル翼の導入やエンジンの改良により『震電』を凌ぐ性能を獲得し

空母機動部隊の次期主力戦闘機に相応しい力を備えた機体だ。

対する『双電』は、エンテ型の形状を受け継ぎつつもジェットエンジンの搭載数と位置が変更されており、

両翼に1基ずつ半埋め込み式で搭載されるといった

『雷電』とは大きく異なる

シルエットをした新型攻撃機だ。

いずれも、これまでの主力機、

『震電』や『秋水』を凌ぐ機体で

これから『神の雷』を恐怖のどん底に追い込むであろう新たな刃だ。

ここはハワイ。

かつて日本軍により破壊し尽くされた港はすっかり修復され、その一部が

日本海軍の補給基地として提供されていた。

その補給基地から少し離れた所で夕陽を浴びる『赤城』。

「……………大和……………」

1年前に消えた戦友^{とも}の名を
呟く赤城の表情は、寂しそうだ。

「ミス・アカギ。どうされました？」

後ろから優しい声が聞こえる。

すると、そこには『自由の剣』の
主力空母、『ルイジアナ』の艦魂、
ルイが赤城を見つめていた。

汚れなきグレーの瞳、肩までかかる
美しい銀髪が特徴的な『新米軍人』は
どこか大和に似ていて、
放っておけない可愛い後輩である。

そんな後輩に心配は掛けたくない。

「……………ああ、ルイ。大丈夫だ」

何とか誤魔化そうとするが、
表情からしてバレバレである。

「……………ミス・アカギ。

ミス・ヤマトがご心配なのですネ」

「……………!!!」

しまった、と赤城が内心で叫んでいると
ルイの瞳に大きな水滴が現れた。

「申し訳……………ありません」

赤城は、ルイを優しく抱き締めた。

「お前は、大和に何もしていない。

何も罪悪感を感じる必要は無い」

その夜、星空を眺めていた赤城は

飛行甲板に1人の青年が
居ることに気が付いた。

「お前が空き時間に、飛行甲板
に来るとは珍しいな。アレン」

流暢な英語で青年に話し掛ける赤城。

それもその筈。青年の瞳はブルーだ。
どう見ても日本人ではない。

「オイオイ！冷たいな、赤城！
一応、日本語は出来るんだぜ？」

彼は、アレン・レノックス。

過去、高い給料で良い暮らしをしようと望んで外務省に属していたが、

スリルも刺激も無く連日、書類の山と格闘しなければならぬ仕事に

耐えかねて、たった3ヶ月で

軍隊に転職したという異色の経歴を持ち

現在は『赤城』の臨時補充パイロットを務めている旧合衆国海軍航空隊のエースパイロットだ。

旧合衆国の体制崩壊と共に、
『自由の剣』に属したのだが、

その理由を聞いた赤城は呆れ果てた。

『イイ女とむさ苦しい野郎は
どこの国も変わらない』との事だ。

だが、ありのままの自分を何の疑いもなくさらけ出す自由奔放な青年に対して

赤城は親しみを感じていた。

「そうか、すまなかったな」

赤城が日本語で詫びの言葉を紡ぐと
アレンは、嬉しそうな笑顔を
さらけ出した。

「おう、そうしてくれると嬉しいぜ」

微笑を見せ、頬を僅かに赤らめる赤城。

次の日、旧合衆国・旧フロリダ州の
ペンサコーラ付近の海では

激しい戦いが繰り広げられていた。

無数の弾幕を、かいくぐりながら
数機の『スパーク』が敵艦に

ロケット弾を撃ち込む。

そしてロケット弾が敵艦を
沈黙させると同時に『スパーク』は

急上昇し、弾幕の届かない
高度まで去っていった。

その様子、まさに一撃離脱。

それが数回繰り返され、

もはや『神の雷』側の艦隊は

数える程しか艦船が残っていない。

もはやペンサコーラ奪取は目前――――

誰もが、そう思った瞬間だった。

この時代に存在しないはずの
ジェット戦闘機が現れたのは。

F-18『ホーネット』を駆る
ジョン・スミスは、

この『幸運』に感謝していた。

憎きジャップと、それに汲みする輩を
皆殺しに出来る力と機会をくれた
幸運の女神に。

「ジャップに汲みする同胞よ！

同じアメリカ人として、俺が！
貴様らを地獄に叩き落としてくれる！」

F-18の機関砲が『スパーク』を
一瞬で粉碎してみせる。

———第24話に続く

N o . 2 3 アメリカ内乱編第1話『アメリカ大陸燃えゆ』 （後書き）

赤城

「懐かしいな、ジョン・スミス」

作者

「出番をあまり与えなかったのは
失敗でしたな……………（滝汗）」

飛龍

「まったく、重要キャラなんでしょ？
自分で創作しておいて、無責任な」

作者

「ううう、飛龍さんの仰る通りです。
全くもってその通りでございます……………」

No. 24 アメリカ内乱編第2話『帰還』

時は、『大和』が未来へ旅立った頃と
ほぼ同じ時期に遡る。

当時の合衆国政府は、彼らから見て

『小国』の日本に敗れたショックが
未だに癒えておらず、

敗因を議論する日々が続いていた。

その敗因の一つとして持ち出されたのが
人種差別意識と白人至上主義である。

『白人は、他人種よりも優れている』

この意識がアメリカに日本の力を
見誤らせたのだと主張した所、

アメリカ政府は、国家反逆罪として

人種問題を持ち出した者達を拘束。

それを見せしめの意味で報道したが、却って事態を悪くする結果となった。

『アメリカ政府は正気を失った』

この事実は今米に知れ渡り、

軍隊はクーデターを起こして合衆国の現政権を打倒しようとする改革派、後の『自由の剣』と

クーデターに参加せず、現政権を護ろうとする保守派、後の『神の雷』に

二分して対立。

暫くの間は冷戦状態だったが、ある事件が戦争を誘発する事に。

保守派の兵士達による
アフリカ系アメリカ人の虐殺だ。

男性や老人、子供はあらゆる手段で殺し、若い女性はレイプするという

軍人にあるまじき行為に対して

怒りを覚えた改革派が攻撃を仕掛け、
そのまま戦争状態に――――

当初は改革派が有利だったが、

保守派は優れた科学者と

デトロイトの工業力で

新兵器の開発・量産を行い、

徐々に改革派を押し返し始めた。

この事態に動いたのは日本だった。

改革派と同盟を結び、『震電』の
設計データを無償で提供。

日本国の政府は、海軍の空母機動部隊を

一部、援軍として派遣する事を約束。

当時、新型艦載機『雷電』と『双電』の配備が完了していた『赤城』を

真珠湾経由でアメリカに派遣。

その頃、アメリカでは『自由の剣』が旧テキサス州の奪取に成功、

初めてアメリカ大陸の東海岸側に港を持てるようになり、

『自由の剣』優勢に傾き始めたが……………

突如として現れた『招かれざる客』の乱入により、その優勢は崩れ始めた。

「ヒヤハハハハハハ！脆い！脆い！」

F-18のパイロットが笑いながら

操縦桿のトリガーに掛けた指に
軽く力を込めると同時に

機関銃弾がエンテ型の敵機を粉碎する。

「アンディ、そろそろ行くぞ」

部隊を指揮するジョン・スミスが
部下のアンディ・デイライトに

付いてこい、と命じる。

彼らの目標は『自由の剣』の旗艦、
『オントリオ』である。

「見えたぞ、アンディ」

下方から、届きもしない対空砲を
撃ってくる艦船に対して

蔑むような視線を注いでいたアンディは
その中に一際大きい空母を見つけた。

「あれだ。沈めろ」

ジョンの指示にアンディが

ニヤリと笑い、機体を急降下させる。

「Good—bye Ontario!」

『オンタリオ』に別れを告げ

空対艦ミサイルを放とうとした刹那、

突然、思わぬ方向からやって来た

対空ミサイルが視界に侵入してくる。

「……………えっ？」

次の瞬間、アンディ・デイルイトの
F—18はパイロットもろとも

木っ端微塵に碎け散り、
僅かに残った鉄クズが海に落下した。

「対空ミサイルだと!?!」

ジョンがミサイルの飛来した
方向を睨み付ける。

「……………あ、あれは……………」

1年前に沈めた筈の巨艦が
海上を悠々と駆けているではないか。

「……………ジャップめ!!」

悪態をつきながら、撤退するジョン。

帰るべき場所へ戻った『大和』は、
『歴史上』では沈められる筈だった

『オンタリオ』を救い、
安堵の空気に包まれていた。

「『オンタリオ』に通信。
あちらの艦長と話がしたい」

暫くして『大和』の、光信号による
モールス通信が『オンタリオ』に
向かって発信される。

『我、日本国海軍所属艦 大和。
貴艦の艦長との対話を希望する』

「大和が戻ってきたのか!?!」

ペンサコーラ近海の戦闘において

突如として現れた『大和』の情報は

真珠湾の赤城にも届けられた。

「はい。ミス・ヤマトに
間違い無いようです」

空母『ルイジアナ』の艦魂、
ルイが肯定する。

「良かった……………本当に……………」

小さな嗚咽を漏らす赤城。

マイアミ近海に浮かぶ国連軍の空母
『オクラホマ』。

21世紀の国連により派遣された刺客の

目的は、太平洋戦争を日本が勝利する歴史を『改変』する事。

しかし、そこは『正史』と異なりアメリカ軍同士が争う世界だった。

最終的に日本を撃滅する目的を持った『オクラホマ』は、

『神の雷』側に加勢。

その輝かしい初陣となる筈が突然現れた戦艦によって

惨めなモノに変えられてしまった。

それが『オクラホマ』艦長、ディビット・ジョンソン大佐のスキンヘッドに、くっきりと青筋が浮かんでいる理由だ。

「どういう事だ！？この計画は

ジャップには内密で進めていた筈！」

拳をデスクに叩きつけるが、
怒りは一向に収まる気配が無い。

「おのれ……………！」

――

謎の部屋の中で少年――御前は

微笑を浮かべ、歴史の成り行きを
静かに見守っていた。

「人間とは実に面白い――
君はどう思う？ 翔斗」

質問を受けた青年――天宮 翔斗は
御前と瓜二つの微笑みを見せる。

「はい。御前と同じでございます」

御前は、その答えに満足したかのように
グラスにワインを注ぐ。

「『観察者』の様子は？」

ワインを僅かばかり、口に運ぶ御前。

「はい………まだ『観察者』としての
自覚は無いようですが………」

御前は、それを聞くと
グラスを空にし愉快そうに笑う。

「それは面白いね。『彼女』が
驚く顔を見るのが楽しみになってきた」

———第25話に続く

「そうか……………物量的には我々が不利……………か……………」

『自由の剣』は、これまでに占領した旧合衆国の領土にあまり鉱山が無いという現実には直面している。

対する『神の雷』は、巨大工業都市のデトロイトを保有している上、

カナダ領土の一部に侵攻し

豊富な金と鉄が取れる鉱山を確保済みであり、物量的に

優勢を保っている。

「物量的に不利な我々には方法が……」

『自由の剣』側の将校が頭を抱える。

「あります。唯一の手段が」

その声がした方向に振り向くと、

若い将校が地図を手にして
机に近付いてきた。

「頭脳を壊せば良いんですよ」

その指がワシントンD・C.を指す。

それに対して年配の将校は冷笑を見せた。

「どうやって攻め込む？道中には
敵さんの軍隊がわんさか待っている」

だが、若い将校は余裕の笑みを崩さない。

「簡単ですよ。東海岸側の戦力の殆どをある場所に引き付けられたら

危険性はグッと下がります」

そう言い、フロリダ半島を指さす。

「フロリダ半島は、ワシントンに海路で攻め込むに当たって

重要な場所です。そんな場所が敵の手に落ちると聞けば

『神の雷』は焦る筈です」

そこで年配の将校がハツとなる。

「敵さんは……フロリダ半島に兵力を集結させる………と？」

若い将校は優雅な仕草で頷いた。

「敵をフロリダ半島に引き付けている間に、本隊はアパラチア山脈沿いに

コッソリ進軍してワシントンで破壊活動を行います。

護るべき頭脳を失えば、『神の雷』の結末に綻びが現れる筈です。

そうすれば叩きやすくなります」

ここは国連軍空母『オクラホマ』。

「『オクラホマ』には武器弾薬を満載してあるが、この量でも

大規模な戦闘は2回が限度だろう」

艦長のディビット・ジョンソン大佐は
苦い顔で部下達にそう告げた。

「21世紀と違って兵器の弾薬は
補給出来ないからな。」

この量でカタを付けねばなるまい」

彼らが狙うのは、勿論『大和』である。

——旧合衆国・ホワイトハウス

「何っ！？フロリダ半島攻略作戦だと」

大統領のアーク・クラッチ將軍が
驚きの表情で部下に問う。

「あそこを奪われたら、

我方がアメリカ西部を奪い返す際に
かなり響いてきます。

フロリダ半島に兵力を
結集させる許可を下さい!!」

殆どをデスクワークで過ごし、
戦闘とは無縁のクラッチ将軍は、

少し考えれば気付けたかも知れない
敵の真意に気付く力すら無かった。

———気付いた所で、
どうにもならないが。

数週間後。

メキシコ湾に佇む『大和』。

その艦魂、大和は朝靄に包まれた
水平線に懐かしい気配を感じ取った。

『本体』は大規模な改修を受けて
かつての面影は消えていたが、

艦魂の放つ『気』は前と変わらない。

「大和————！聞こえるか！」

見覚えがあるポニーテールが
こちらに向かって手を振る。

「……………あ……赤城さんっ！！」

赤城が大和に駆け寄り、抱き締める。

「大和……………よくぞ生きて戻った!!」

「赤城さん……………ただいま帰りました!」

歓喜の涙を流し、再会を喜ぶ2人の
微笑ましい光景を眺める青年の存在に

赤城が気付いた瞬間、ハツとなる。

「お前は……………神谷? 神谷 雪人か!?!」

はい、と頷く青年。

「お久しぶりです、赤城さん」

雪人を暫く見つめ、ニヤリと笑う赤城。

「変わったな、少年……………
いや、神谷 雪人上等整備兵」

それに対して、雪人は
優しく微笑みながら答えた。

「ありがとうございます。

……………それと、今の自分は
神谷 雪人機関兵長であります」

フツ、と微笑を見せる赤城。

「最近、アラスカで発掘された遺跡が
学会の興味を集めているそうですよ」

雪人より若い機関兵が、艦載機の
パイロットの1人と話を盛り上げている。

「ああ、例の遺跡か。何でも……………」

約600万年前の地層から電線や飛行機、
自動車とかの残骸が出たらしいな」

2人の話は既にヒートアップしており、邪魔しない方が良さそうだと判断した雪人はその場を去ることにした。

去り際に、このやり取りが雪人の耳に入った――――

「その文明、遺跡に遺されていた文字の解説に成功した人達の話によると

国の名前は『ファーレン』で

当時は他国から『ヤヌリウス文明』と呼ばれていたみたいですね」

「そうか。何であんなに優れた文明が滅んでしまったんだろうな」

メキシコ湾に集結しつつある

『自由の剣』と日本国海軍の艦隊。

その規模は我々の歴史で有名な戦い、
ノルマンディー上陸作戦時の連合軍に
匹敵するものであり、見る者を圧倒した。

「作戦行動開始まであと72時間だな」

時計を眺めながら、そう呟く赤城。

アメリカの、そして世界の未来を
決める戦いが目前に迫っていた――

――第26話に続く

No. 26 アメリカ内乱編第4話『復讐鬼現る』

朝日の光を浴びる空母『赤城』から

飛び立っていく艦上戦闘機『雷電』、
艦上攻撃機『双電』。

その他にも『オンタリオ』をはじめ

『自由の剣』に属する空母から

『震電』が次々と飛ばたっていく。

空中で見事な編隊を組んだ航空団は
一路、フロリダ半島の空へ向かった。

フロリダ半島の航空隊基地から
次々と飛ばたっていく『神の雷』の

主力戦闘機Pー80シューティングスター。

「航空隊は、決して敵に制空権を渡してはならない！！良いな！？」

司令官の代わりに叫ぶ通信機が沈黙したのを確認した

ボブ・ウォレスは安堵の溜め息をついた。

「よし、いっちょやりますか！！！」

Pー80が先行していた敵軍の『雷電』の群れに飛び込む。

機銃が唸りを立てる音が交錯し、

『雷電』の1機が黒煙を噴きながら海面へと墜ちていく。

「ハハハハハ！ざまあみやがれ！」

敵軍の新鋭機を撃墜した喜びで
思わず大声を出して笑うボブ。

しかし、その喜びはP-80のコクピットを
狙いに定めた『雷電』の機銃によって

粉々に打ち砕かれた。

『自由の剣』と日本海軍の連合軍が

フロリダ半島西海岸の制空権を
確保したのは、それから暫くの事だった。

「今頃、フロリダ半島では友軍が
ド派手なドンパチをしているに
違いありませんよ、ブラナー隊長」

副官であるアレックス・スミス少佐の
愚痴に苦笑を漏らしたのは、

このワシントン攻略特務隊の隊長、
エルヴィン・ブラナー大佐だ。

「フロリダ攻略に回されなかったのは
確かに残念だ。だが、本当の英雄に
なるのは俺達だという事を忘れるな」

その言葉に間違いは無かった。

そもそも『フロリダ半島攻略作戦』は

『ワシントン攻略作戦』の存在を
敵に知られないようにする為の

大規模な陽動作戦なのだ。

……もつとも、戦っている兵士達は
本気でフロリダ半島を占領する気で
やっているに違いないだろうが。

その頃、フロリダ半島西海岸の
アパラチー湾は連合軍艦艇によって
覆い尽くされた状態であった。

そして艦砲射撃、ロケット弾による
地上への容赦ない攻撃が行われ

上陸部隊を待ちかまえていた
敵軍地上部隊は、ことごとく粉碎された。

「Oh, No! Iron storm!」

鉄の暴風が『神の雷』側の兵士達を
容赦なく吹き飛ばしていく。

「こ、これは、かなわん!!
全員撤退だ——!!——!!」

一目散に逃げ出す『神の雷』の兵士達。

——その時。

連合軍艦艇の1隻に対艦ミサイルが
突き刺さり、たちまちそれを

真っ二つに切り裂いていく。

「——何だっ!?!」

上空には、獲物を狩らんとする
鉄の狩猟者、F-18が存在していた。

ジョン・スミスは、眼下に広がる
無数の連合軍艦艇の中に在るはずの

『ある戦艦』を血眼になって
捜し求めていた。

「おのれ……………ヤマトめ！」

時は1年前に遡る。

『ヤマト』が突然光り出し、
眩しい光が視界を覆った。

どの位気を失ったのだろうか……………

「……………気が付いたかね？」

やや年老いた声が聞こえてくる。

「……………ここは……………」

ジョンが体を起こそうとする。

「待て。無理に動くな。」

「……………ここは、米軍の艦だ」

友軍の艦に救われた事で安堵した
ジョンの意識は再び遠退いた———

ある日、兵士の1人が気を利かせて
持ってきた新聞がジョンの脳天に

強烈な一撃を喰らわせる。

「2015年……………だと？」

この時初めて、ジョンは自分が未来に
来てしまった事を悟った———

しかも、その世界のアメリカの歴史は
屈辱の極みと言えるモノだった。

あの、誇り高きアメリカが

アジアの小国、しかもよりによって
低能かつ、劣等民族のジャップと

対等になっているではないか。

それからというものの、ジョンの腹は
常に晴れない怒りで煮え立っていた。

———あの男に出会うまでは。

ある日、ジョンの前に現れたのは
国連・軍事開発部門の人間だった。

その男は、カウンターでウイスキーの入ったグラスを握り締めているジョンに

眼鏡越しに優しい視線で

『お隣、宜しいですか』と話し掛けた。

ジョンは『ふん』と鼻を鳴らしながらもあまり敵意のこもっていない目を向けた。

「ジョン・スミスさん。

我々は貴方の、叶えたくても決して叶うことのない望みを叶える力を持っています」

すると、ジョンは変人を見るような目をその優男に向けた。

「……………何が言いたいんだ？」

ジョンの耳に口を近付ける男。

そして囁くように告げた。

「過去に戻りたいのでしょうか？」

ジョンが真っ赤な顔に驚きの表情を
浮かべ、見開かれた目から

男に視線が注がれる。

「……………証拠は？」

すると、男はジョンに手を差し出した。

「私に付いてきて下さい」

———国連・軍事開発部門オフィス

オフィスの一角に作られた客間で
ジョンはある男と対面していた。

合衆国海軍大佐にして原子力空母
『オクラホマ』の艦長、

ディビット・ジョンソンだ。

彼もまた、ジョンと同じく嫌日家で
嘗てアメリカを敗北に追い込んだ

イエローモンキーの島国を
徹底的に叩き潰す機会を狙っていた。

彼との密約により、ジョンは
F-18の操縦訓練を受けた後、

『オクラホマ』配属となった。

——そして、運命の日——

『オクラホマ』に搭載された
タイムマシンが起動、

ジョンの視界を再び
白い光で覆い尽くした――

「俺は戻ってきた！ 貴様を沈める為に！」

復讐鬼と化したジョンの眼が
『大和』を視界に捉える。

――第27話に続く――

No. 27 アメリカ内乱編第5話『フロリダ陥落！ジョンの最期』

戦艦『大和』の艦魂、大和は
上空に敵意を感じ取った。

翼の下から放たれた物体を
拳銃で全弾撃ち落とし、

敵機に向けて発砲していく。

「あの機体……何処かで
感じた気配がするわ………」

『自由の剣』では『スパーク』と
呼ばれる、ライセンス生産された

『震電』が敵軍のP-80を次々と
叩き落としていく中、

制空権を失った『神の雷』側の司令部に
対地装備を施された『双電』が

牙を剥き出しにして襲い掛かる。

主翼の下に懸架されたロケット弾が
次々と『獲物』目掛けて放たれ、

大地を揺さぶる爆発音と共に
『獲物』を喰らった。

「よっしゃ！司令部を潰したぜ！！」

『双電』部隊が歓喜に震えた次の瞬間、
それはF-18の放ったミサイルで

木っ端微塵に打ち碎かれた。

「野郎！！よくも！！」

『雷電』部隊とF-18部隊による
ドッグファイトが始まった――

「くっ！このままでは！！」

『雷電』を駆る村沢 智徳大尉は、
後ろから追いかけてくる敵機に

悪態をついていた。

「……………そうだ、あれなら」

頭に浮かんだ打開策は、あまりにも
無茶で自殺行為とも言えたが、

どっちみちこのままでは機関銃で
蜂の巣にされるか、

距離を取ろうとしても誘導弾で
吹き飛ばされるしかない。

「————やってやる！！」

村沢が操縦桿を少し引き上げ、
エンジン出力をギリギリまで落とした。

そして、操縦桿を目一杯引き上げ――

「クルビットだと!？」

F-18を駆るジェイク・クリナーは
驚愕を隠せずにいた。

(何故、劣等民族がクルビットを!?)

その一瞬で正しい判断が出来なかった
彼は、『雷電』の機関銃により

粉々に打ち碎かれ、機体の残骸と
共に海にぶちまけられた――

「よっしゃ!見たか!!」

ここは空母『オクラホマ』。

「艦載機部隊の15%がレーダーより消失しています、大佐!!」

オペレーターが信じられない、という表情で、損害状況を報告する。

「おのれ……………役立たずめ!!」

大佐がくわえていた葉巻を噛みちぎる。

「もう役立たずは置いていく！
大西洋まで離脱するぞ！」

『オクラホマ』が大西洋へ針路を
変えようとしている中、

彼らは海中に潜む狙撃者の存在に
気づかなかった——

海中で息を潜めていたのは

『自由の剣』所属のガトー級潜水艦

『ボーンフィッシュ』だった。

同型艦の『アルバコア』、

『グロウラー』と共に

『神の雷』が上空と海上の敵に
気を取られている隙に、

激しい戦闘の下を潜り抜けて

『安全圏』である後方に隠れている

『オクラホマ』を探し当てる
任務に当たっていたのだ。

「……………フッフッフ……………」

地獄を見るんだな、坊や」

『ボーンフィッシュ』艦長の
エリック・カーチラス大佐は

不敵な笑みを浮かべ、命令を放った。

「魚雷発射準備!!あの坊やのどてつ腹に
キツイ一撃をお見舞いしてやれ!!」

「アイアイサー!!」

『ボーンフィッシュ』の艦首にある
魚雷発射管の1つが解放され、

そこから放たれた魚雷が

『オクラホマ』目掛けて突進し――――

凄まじい轟音と共に『オクラホマ』の
鋼の皮膚が引き裂かれ、

中に浸入した水が『オクラホマ』を
海底へと引きずり込む。

「『オクラホマ』がやられただど!?!」

ジョン・スミスは衝撃を受け、

頭が真っ白になっていた。

次の瞬間、機体に衝撃を感じた。

「うおっ!？」

キャノピーの後方を振り返ると
エンジン部分から激しい黒煙が
噴き上げているではないか。

「ええい、脱出を……………!？」

脱出装置のレバーを引くが、
反応してくれない。

「……………これまで、か……………」

……………ジャップめ……………!!」

敵に対して呪いの言葉を紡ぐジョン。

———しかし———

「……………ハハッ……………」

何やってんだろうな、俺は……………」

レベッカが居なくなつて、
とても悲しかった。

ただそれだけなのに、くだらない事で
それを紛らわそうとしてしまった。

それを思い、自嘲気味に笑うジョン。

ふと天を見上げると、自分が愛した
少女が笑顔で手を伸ばしてきている。

「……………ああ……………」

迎えに来てくれたのか、レベッカ」

ジョンが右手を天へと伸ばす。

そして、レベッカとジョンの手が
互いを握った瞬間———

F-18が空中で爆発四散、

ジョン・スミスという若者は
この世から姿を消した――――

――――

『自由の剣』がフロリダ半島の
『神の雷』残存勢力掃討に当たる中、

エルヴィン・ブラナー大佐率いる
ワシントン攻略特務隊は

ゆっくり、だが確実に
ワシントンに近付いていた。

「フロリダ半島攻略に回された連中、
本当にフロリダ半島を手中に
しちまったらしいですね、大佐」

副官のアレックス・スミス少佐が
残念そうな表情を漏らす。

「そうか、ソイツは良かった」

ニヤリと笑うエルヴィンの意図が
理解できないスミス少佐。

「分からんか？フロリダ半島の
占領そのものが陽動だという事が」

その言葉で上官が言いたい事に
気が付いたスミス少佐。

「なるほど……敵さんは海に
目を釘付けにされる訳ですね」

世界の自由を懸けたワシントン攻略は
すぐ近くまで迫っていた——

番外編『発掘された資料の一部の解説結果』（前書き）

作者

「これは、本作のある人物の正体を示すヒントでもあります」

赤城

「そして、『魂を司る存在』とも深く関係しているそうだ」

番外編『発掘された資料の一部の解説結果』

『フアーレン・メディア』

ヤヌリウス暦3912年6月2日

今日の見出し

『人体再生技術、確立』

フアーレル国立大学の
アリヌンティウス教授が

十数年かけて研究を進めていた

『人体再生技術』が完成し、

実用可能段階に達した事が発表された。

政府は、数年前に作成した

『人体再生技術に関する法律』を

来月より施行する予定であり、

その間、国内の大手病院に
アリヌンティウス教授が育成した

『人体再生治療』専門のスタッフと
専用の機材が配置されるようだ。

これにより、我々の生活における
人体の損傷によるリスクが軽減され、
輝かしい未来が訪れるだろう。

第2面

『人体再生技術とは？』

『人体再生技術』とは、
その名の通り、何らかの理由で

体の一部を失った人間に
新しいパーツを与えるものである。

アリヌンティウス教授によると

人間の身体のパーツ全てが
製造可能であり、これによって

身体の一部を失った人々を
元通りに戻せるとの事。

『フアーレン社会クローズアップ』

ヤヌリウス暦3934年10月27日

今日の見出し

『初の人類ベース遺伝子調整商品』

『人体再生技術』を応用して造られた
人工生命体が正式に商品化。

倫理学者たちは、これに猛反対（以下略）

第4面

『今度の人工生命体はどんな商品？』

人間の遺伝子をベースに開発された
人造人間の事である。

彼らは胎児の時点で戦闘能力の向上、
服従遺伝子の植え付け、
監視機能の付加がなされており

これまでの人類を遥かに凌ぐ生命体。

なお『監視機能』とは、

彼らが見た情報を自動的に特殊な脳波で

特定のコンピュータに送信する機能で
これにより遠距離の状況を

リアルタイムで把握する事が可能。

なお、万が一の反乱を防ぐ為、
彼らは自分を人間と
思い込んだ状態で起動する。

休載報告

作者

「1年間休載します」

大和

「えゝ、そんな!!」

雪人

「そうですか……分かりました」

作者

「しかし、敢えて言いましよう。
必ず戻ってくると!!」

金剛

「必ず戻って来いよ?」

赤城

「戻って来なかったら容赦せんぞ」

作者

「はい。それでは、2011年に再び
お会いしましょう!!」

誠に身勝手ですが私生活の都合上、

『超空の戦乙女と時空戦士達』を
1年間休載します。

読者の皆様方には
心よりお詫び申し上げると共に

必ず戻ってくる事をここに誓います。

それでは皆さん、お身体を大事に。

2011年に再びお会いしましょう!!

No. 28 アメリカ内乱編第6話『ワシントン攻略作戦』

迫撃砲による砲撃音が

ホワイトハウスのベッドで寛ぐ

アーク・クラッチ將軍を

現世に引きずり降ろす。

「な、何だぁ!？」

寢間着から急いで軍服に

着替えていた時、ワシントンの

首都守備隊総司令官を勤める

ダニエル・ロバートソン少将が

顔面蒼白で部屋の扉を開けた。

「しょ……將軍! 『自由の剣』が……

アパラチア山脈の方から大規模な

陸上部隊を送り込んできています!!!」

その報告はクラッチ將軍の思考を
数秒間程、凍り付かせた。

（まさか……『自由の剣』の
フロリダ半島攻略戦は………

ワシントンを攻める為の陽動………!?!?）

「良いぞ！このまま続けろ」

ワシントン攻略特務隊を指揮する
エルヴィン・ブラナー大佐は

己自身が、今まさに歴史に残る偉業を
為している事を実感していた。

「————お、『スパーク』か」

『自由の剣』の主力機であるスパークが
飛来し、敵陣にロケット弾を撃ち込む。

「有り難い!!このまま進むぞ!」

そう言いながら配下のM4シャーマンを
進軍させようとした次の瞬間、

先方のシャーマンが爆発四散した。

「な、何だ!!」

「地雷です!!対戦車地雷が
周りに仕掛けられています!」

部下の報告に舌打ちするブラナー大佐。

「このまま戦車に残っていても
迫撃砲の餌食になるだけだ。

各員、戦車を降りて白兵戦に移行する!」

そして、シャーマン戦車から
機関銃や短銃で武装した兵士達が
飛び降りて、幾つかの部隊に分かれる。

「これより、我々は敵軍の指導者、
アーク・クラッチ將軍の暗殺作戦を
実行に移す。——Good ruck!」

「敵の戦車は動けん！ぶちかませ！！」

ブラナー大佐率いる戦車兵達の
迅速な行動もあって、

『神の雷』側の兵士達は、
誰も居ない鉄の塊を
破壊する事に力を注いでいた。

そして、一方的に破壊されるシャーマン。

「ふはははははっ！！見たか！」

高らかに笑う指揮官の
後ろに忍び寄る数人の影。

そして、背中に何かがズブリと
突き刺さる感触と共に指揮官が
口から紅い液体をぶちまけながら倒れた。

「……………ッ！！」

砲兵達が振り向き、銃を構えるが
引き金に指が掛かる前に

銃弾や銃剣を喰らい、絶命する。

「よし！敵の迫撃砲を1門確保した！
味方と通信して、場所を確認した後
敵に向けて撃ち込むぞ！」

突如として襲い掛かって来た衝撃に
思わず悲鳴を上げるクラッチ将軍。

「な、何だ！？」

そこへ、ロバートソン少将が入ってくる。

「味方迫撃砲からの砲撃です！
将軍、退避して下さい！！」

『味方』からの砲撃に
再び凍り付くクラッチ将軍。

「将軍！！専用車両が裏で待機中です。
さあ、安全な場所にお逃げ下さい！！」

「ターゲットを乗せた装甲車が
ホワイトハウスの裏から出て来ました」

通信機に、そう囁いた
兵士がバズーカを構える。

そして、金属の筒から飛び出した
ロケット弾が装甲車の右側に命中、

派手に横転し、数名の人間を吐き出した。

「何かが飛び出してきました！」

「あっ……………ああ……………！！！」

装甲車から投げ出されたクラッチ將軍は
こちらに向かってくる兵士達に向けて
拳銃を構え、発砲し始めた。

「將軍！！ここは我々が！！！」

そう言いながらクラッチ將軍の前に
飛び出た側近達が拳銃で応戦する。

「頼む!!」

クラッチ將軍は、その言葉と共に走り出した。

「チッ!! ターゲットを逃がす訳には!」

そう言いながら手榴弾を構え、
投擲の体勢に入った兵士の胸を
側近の放った拳銃弾が通過する。

「ぐ……………!!」

肉が焼かれながら引きちぎられるような
苦痛に顔を歪めた兵士の手から

手榴弾が滑り落ち、爆発した。

「よし、やったぞ——」

その時、爆煙のベールを突き破って
2、3人の兵士達が襲い掛かってくる。

「…………ッ!!」

とっさに拳銃を構え直すも
既に遅く、その腹に銃剣が到達した。

—————

アーク・クラッチは、瓦礫の陰に
身を隠して、拳銃の弾を込めていた。

先程からの恐怖で吹き出た汗の不快さ、
そして煙たい空気の不快ささえも

生への欲求の前では取るに足らない。

「…………ッ……………」

恐怖が身体から肩を伝って
拳銃に弾を込める左手に届く。

(ええい……………落ち着け!!!)

心の中で自分を殴ったクラッチ將軍は

最後の弾を込める手に力を込めて
それを弾倉へと押し込んだ。

そして、煙たい空気を胸一杯吸い込み
心の焦りを、汚れた空気と共に吐き出す。

「……………」

突如として気配を感じ取った
クラッチ將軍の表情が固まる。

そして、その気配に向けて
引き金を引き――――

戦場に一発の銃声が響いた。

No. 29 真実編第1話『国際テロ組織』

———時は202X年———

中東の某地域に設けられた
テロ組織の極秘拠点を目指して
飛翔する1羽の鋼の翼が在った。

「こちらアルファ1、レーダー上に
ターゲットの敵拠点を捕捉した。
これより対地攻撃に移る」

NATO軍の標準戦闘機にして
イラク空軍の最新鋭機でもある
ユーロファイター・タイフーンが
翼にぶら下げた誘導爆弾を切り離す。

それは空の旅から切り離されると
レーザー誘導に従って、指定された
ポイント目掛けて落下していった。

「こちらアルファ1、目標は破壊された。
繰り返す、目標は破壊された」

——— 米国・国防総省 ———

「廃墟を調査した結果ですが……
敵は小規模な武装組織でした」

若い士官の言葉に舌打ちする中年男。

「SHIT! 今回もハズレか!」

中年男は米軍の高官に相応しくない
下品な言葉を吐くと、中身を飲み終えて
空になった紙コップを握り潰した。

「やはりサイバーテロ組織と
中東の反米武装組織は関係ないと
考えて調査方針を変更すべきでは？」

——— 日本国・国防省 ———

「ふむ………今回も違いましたか」

残念そうな表情になる国防相。

「申し訳ありません、サー。

日本政府に無理を承知でご協力をお願い申し上げたと言うのに」

そう応えたのは在日米軍の総司令官だ。

「しかし、侮れませんな……………」

サイバーテロ組織“デステイニー”は」

「ええ。そこら辺のテロ組織とは格があまりにも違いすぎる……………」

これまで、国防総省のコンピューターが数回ハッキングされ、機密情報が幾つも盗み出されています」

この現代世界ではサイバーテロ組織“デステイニー”の脅威に米国をはじめ、世界が脅えていた。

そして、この世界に物語の始点がある。

——ここは日本の警視庁。

彼らを取り扱っている事件の中でも
一際大きなモノが在った。

「うーん……どうやって消えたのか？
それが分からないんですよね……」

デスクに腰を下ろして考え込む若い刑事。

「近日中に家族の方に会って
情報を集めるとするか。」

——ここ1週間は空けとけ」

世界中で発生した大学生失踪事件。

日本でも2人の若者が姿を消しており
国中が大騒ぎになっている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6920i/>

超空の戦乙女と時空戦士達

2011年3月16日02時32分発行